女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究*

——性役割タイプと自己能力評価を中心として——

鹿内啓子　後藤宗理[1)]　若林　満

近年の女性の職場進出にはめざましいものがあるが，女性における職業意識の確立や，職業選択過程，職場適応やキャリア形成の条件については，学問的努力はまだその緒についたばかりであるといっても過言ではない。職業生活の舞台を中心とした女性の社会進出は，伝統的に男性によって独占されてきた仕事の世界への女性の参入と，そこでの仕事文化・男性文化への適応を中心的課題として呈示している。特に，あらゆる職業分野において，女性の進出がめざましいアメリカにおいては，雇用平等法に基づく性による差別撤廃の運動とあいまって，女性の職業心理学は近年非常な高まりをみている。そしてこの分野での研究の中心テーマの1つとなっているのが，「女らしさ（femininity）」と「男らしさ（masculinity）」をめぐる問題である。多くの研究を支えている基本的仮説は，女性の社会生活への適応は女らしさを代表するfemininityの次元ではなく，男性的特性であるところのmasculinityの次元であるという点に収斂しているようにみえる。さらにこの仮説は，女性が自己の性であるfemininityに加え，masculinityの特性をも兼ねそなえたとき，すなわち一般に両性的（androgynous）とよばれるMFタイプの女性の場合，社会環境への適応は最も促進されるという点にまで高められてきている。以上のような問題意識に支えられ，本研究では女性にとって「力強さ」の自己像はどのように形成され，それが女性としての社会的役割や自己の職業・将来に対する態度にどのような影響を与えるかが，女子短大生を対象とした調査をつうじて究明される。

I　研究の目的

女性のキャリア発達を考える場合，その中心的問題は職業人としての自己像，すなわち職業自我同一性ないしキャリア・アイデンティティの形成に係わる側面である。職業自我同一性は「キャリア成熟度（Career Maturity Index）」（Crites，1965）や職業領域での「自我同一性地位（ego－identity status）」（Marcia，1966），Bem（1974）およびSpence and Helmreich（1978）のMF性役割タイプなど，いくつかの観点から研究がなされてきている。いずれの概念や方法を用いるにしろ，興味の中心は女性にとって職業自己像の達成がどのようになされ，それが職業選択過程にどのような影響を与えるのかという点である。社会化や学校教育をつうじ，現実的で力強い職業自己像が形成されている場合，それは職業興味（Holland，1973）や職業知識（Fitzgerald and Crites，1980），キャリア意思決定（Harren，Kass，Tinsley，and Moreland，1978; Lunneborg，1978; Grotevant and Thorbecke，1982）に重大な影響を与える。また力強い職業自己のイメージが，働く婦人の職場適応と密接な関係を有することは，若林ら（1981）の研究からも明らかとなっている。

女性の職業選択や社会的役割意識に係わる自我同一性の問題は，masculinity－femininityの側面からもっとも多くの研究がなされている。Bem（1974）はアメリカ社会において，男性・女性のそれぞれにとって望ましいとされる特性のリストに基づき，それぞれ20項目からなるMasculinityスケールとFemininityスケール（Bem Sex－Role Inventory；BSRI）を作成した。つづいてBemはM得点とF得点の差を基準に，Mが高くFが低いmasculinityタイプと，その逆でMが低く

＊　本研究のためのデータ処理は，名古屋大学大型計算機センターのFACOM M－200によった。

本論文の執筆は次のような分担で行なわれた。I（目的）とII（方法）は若林，III（結果1）とIV（結果2）は鹿内，V（結果3）は後藤，VI（まとめと討論）は若林・後藤である。

1）名古屋市立保育短期大学講師

Fが高いfemininityタイプ，両者が同程度に高い（ないしは低い）androgynyタイプの3類型を明らかにした。これらの類型でmasculineとfemineのタイプはそれぞれ，男性・女性のステレオタイプ化された性役割観に規定され，一方の極に高度に性別化が行なわれている型である。BemはKohlberg（1966）の性役割社会化の理論を援用しつつ，この両タイプはそれぞれの性役割自己像を強化するmasculinityないしfemininityタイプの行動のみに動機づけられ，結果として行動パターンは硬直化し，多様な環境刺激に対する適切な対応を欠く傾向をもつと説明している。これに対しandrogynyないしMF型では，行動は狭く限定された自己概念に制限されることなく，状況や必要に応じてmasculinityの特性とfemininityの特性が柔軟に機能する適応力に富んだパターンを示すことになるという（Bem, 1975)。

Bem（1975）は大学生を被験者に用い，上記のような性役割自己像の3つのタイプと適応行動との関係を，実験室場面で明らかにした。まずBSRI尺度を用いて，M型，F型，MF型の学生が，各タイプ男女それぞれ9名ずつ選び出された。第1の実験では独立的・非同調的行動の強さが，マンガの面白さの判定に基づく集団規範への同調傾向という観点からテストされた。結果は男女とも，F型の学生がもっとも高い集団圧力への同調傾向を示し，逆にM型とMF型ではともに有意に強い非同調・独立的な反応傾向を示した。第2の実験では，小動物を相手にした女性的な遊戯性行動の出現頻度が観察されたが，結果は男性と女性で異なったパターンを示した。男性ではF型とMF型が，M型に比べ有意に高い遊戯性傾向を示したが，女性ではM型とMF型が高く，F型が有意に低いという結果となった。以上の結果は男女を問わず，androgynyとよばれるMFタイプが，男らしさ（集団圧力への非同調）と女らしさ（小動物との遊戯）を状況によって使い分ける高度な行動の柔軟性を有することを示すものであった。なお女性の場合，masculineタイプもandrogynyと同程度の柔軟性・適応性をそなえていることが明らかにされた。

女性におけるhigh femininityが，高い不安傾向や低い自尊心・社会的受容性に関係していることは，すでにいくつかの研究において知られている（Cosentino and Heilbrun, 1964; Gall, 1969)。Bemの実験結果においてもfemineな女性は，独立心も遊戯性もともに低く，自信や自尊欲求の低さ，不活発で萎縮した行動傾向といった特徴をうかがわせるものがあった。これに対しmasculineないしandrogynyの女性は，活発で高度な行動の柔軟性をそなえている。

BemのandrogynyタイプにおいてはM得点とF得点がともに高い，いわばMFタイプと，両得点がともに低い，いわばmfタイプは同一の性役割自己像を有するものとしていっしょに類型化されているが，MF型とmf型は区別して取り扱うべきだという主張が，Spenceら（Spence, Helmreich and Stapp, 1975; Spence and Helmreich, 1978）やBaucom（1976)によってなされてきた。SpenceらはRosenkrantzら（Rosenkrantz, Vogel, Bee, Broverman and Broverman, 1968）の研究に基づき，性役割タイプ測定のためのPersonal Attributes Questionnaire（PAQ）を開発した。PAQでは典型的な男性を記述する特性語（M尺度）と典型的な女性を記述する特性語（F尺度）が区分され，各尺度のメディアン分割から生み出される2×2の4グループが，それぞれandrogynous（M，Fともにメディアン以上），masculine（Mが高くFが低い），femine（Fが高くMが低い），undifferentiated（M，Fともにメディアン以下）と名づけられた。Spenceらはこの4群ごとにTexas Social Behavior Indexから得られた自尊心（self esteem）得点を比較し，男女を問わず自尊心のスコアはandrogynous群でもっとも高く，masculine，femineと続き，undifferentiatedでもっとも低くなることを明らかにした。この結果を受けBem（1977）もBSRIに基づき同様な4類型を作り，自尊心スコアの比較を行なっているが，結果はSpenceらのものと同様であった。しかし，他のいくつかの従属変数においては，androgynousとundifferentiated群とは有意な差を示さなかった。

Masculineないしandrogyousタイプの女性は，職業選択過程における意思決定の様式において，他のタイプの女性と異なっていることを示している研究がいくつかみられる。Harren, et al.（1978）は，アメリカの大学における専攻の決定において，Bemの作成になるBSRIで高いM得点ないし，高M高F群に分類される女性は，直観的ないし依存的ではなく，合理的な意思決定のスタイルをもち，同時に進路の決定においてより進んだ段階に移行しており，自己の選択により満足していることを明らかにした。また，Morelandら（Moreland, Harren, Krimsky－Montague, and Tinsley, 1979）はHarrenらのデータを用い，Bem尺度に基づく性役割自己の4類型が，学生の職業選択に係わる意思決定の進展と体系的な関係をもっていることを明らかにした。すなわち，職業選択への意思決定段階はandrogynous群でもっとも進んでおり，ついでmasculine，femine，undifferentiatedの順となっていた。特に前3者の間では大差はなかったが，最後のグループの見劣りが顕著であった。Grotevant and Thorbe-

cke (1982) は，高校生を対象にMarcia (1966) の方法に基づく自我同一性地位インタビューを実施し，その結果とインタビュー後に行なったPAQ (Spence, et al., 1978) の性役割タイプ検査との結果を関係づけた。その結果，男女ともandrogynous タイプにおいて，職業自我達成の地位にある者の割合がもっとも高くなることを明らかにした。

以上の結果は性役割タイプとして同定された女性の自己認知のスタイルが，女性の（男性の場合もほぼ同様に）いろいろな場面での行動を説明する有力な手がかりとなることを示唆している。特にandrogynous ないしはmasculine とよばれるタイプにおいては，feminine やundifferentiated のタイプに比べ，self esteem が高く，強い非同調傾向を示し，合理的・理性的意思決定スタイルをもち，職業選択においてもより進んだ段階に達していることが明らかとなった。これらの結果は大学生ないしは高校生を被験者として用いた研究から得られたものであるが，若林ら (1981) の研究は，類似の傾向が有職婦人についてもみられることを示している。この研究では，SD 法を用いて働く婦人の職業自己イメージが調べられたが，第Ⅰ因子を構成する「力強さ」の尺度が，職場適応の諸側面（仕事のやりがい・心身適応・人間関係適応）と一貫した有意な相関関係をもっていることが明らかにされた。また働く婦人にあっては，力強さの自己イメージは女子学生と同様，女性の社会的役割に対する平等主義的態度と，ゆるいながらも有意な相関関係を示していた。

以上の結果をふまえ，本研究では大別して次の2つの目的が追究される。第1の目的は，BemのBSRIやSpence らのPAQ に相当する，相互に独立なmasculine と feminine の2次元を含む尺度を独自に構成し，性役割の4類型をタイプ分けすることである。この目的の基礎となるmasculine と feminine の特性語の選別作業は，すでに後藤 (1981) および若林ら (1981) の研究でなされているので，今回の調査においてはそれらが利用される。続いて性役割タイプ類型化の妥当性を検討するため，4タイプの女子短大生が，大学生活への適応や職業志向において，どのような違いを有するのかが検討される。Bem (1975, 1977) や Harren らの研究に従がえば，MFタイプのandrogyny ないしMタイプのmasculine 型の女子学生が，他のタイプの学生に比べより力強い自己イメージや高い自己能力評価ないし self esteem，大学生活へのより高度な適応を示すとともに，より平等主義的な女性の社会的役割意識や積極的な職業志向，長期的なキャリア展望を示すものと予想される。

第2の目的は性役割タイプとは別に，女子学生が特定の短大を選び，そこでの大学生活をつうじて一定の社会的態度や職業志向を形成していく背景には，どのような要因が作用しているのかを明らかにすることである。いうなれば，短大生の職業社会化における大学の機能に関する問題である。この分野ではアメリカの4年制大学においてすでに，Astin (1977) の大規模な縦断的研究がなされている。また日本の大学での男子大学生のビジネス社会への職業的社会化に関する研究（Wakabayashi, 1977; 南，若林，西河，小林，1979）も行なわれているが，女子大生の大学生活をつうじての職業社会化過程については，体系的な研究はいまだ行なわれていない。女子学生の職業志向は，まず第1に大学や学部の専攻の専門いかんで大きく左右される。例えば特定の専門職（看護婦や保母など）の育成を目的とした短大と，一般教養を中心とした短大では，学生の態度や職業に対する考え方は大いに異なってこよう。このような専門性の問題に加え，女子大生の職業選択や職業志向を直接的に規定する個人差の要因として，職業人としての自己能力評価の問題があげられる。というのは学生が特定の職業目的に強く志向するためには，その職業領域での活動にふさわしい特性や能力を，自分自身が十分そなえているという自己認知が存在することが不可欠であるからである。

従来このテーマは社会的状況や対人関係場面での自己有効性についての信念という観点から，自尊心（self esteem）の問題として研究されてきた（Spence and Helmreich, 1978)。しかし職業人としての自己の有効性にとっては，より具体的で実際的な能力についての自己評価が要求されよう。例えば，自分にどれだけ忍耐力や協調性，企画能力，リーダーシップなどの能力があるかといった，職務遂行に直接係わるレベルでの自己能力の認知である。このようなレベルでの能力や特性は，固定的な個人のパーソナリティの一部というよりは，教育や訓練などによって短期的に形成されうる，多分に可変的な自我領域に属するものである。それだけに，短大生が学生生活をつうじて（場合によっては高校時代からの延長として）これらの能力をどれだけ高め，結果としてどれだけ高い自己能力評価をもつに至ったかということは，その学生の職業自我同一性の形成と職業選択に，多大な影響を与えるものと予想される。

以上2つの研究目的に従って，本研究では性役割タイプに関する問題と，女子大生の自己能力評価に関する問題の2つが取り扱われる。この2つの問題は，本研究の究極的関心である，女性の職業社会化と職場適応問題に深く係わっている。すなわち，職業生活において女性が高水準の職場適応と能力発揮を実現することを可能にする条件は，学生生活における女性の職業社会化のどのよ

うな側面やエピソードから生まれてくるのか，という問題である。この問題の解明は，より慎重に計画化された，学生から職業人への移行過程（若林，1981）に焦点を当てた縦断的研究に待つほかはない。本研究ではそのための基礎的作業として，上記2つの問題を一応個別の課題としてとり上げ，それぞれの結果についてべつべつに論じていくことにする。

Ⅱ 方 法

1 被調査者の選定と調査の実施

名古屋市を中心とする短大の内から，職業志向における専門性の程度を異にする4つの短大（専攻科）が選ばれた。もっとも専門職志向の強い看護短大生，ついで保母をめざす保育科の学生，他の2校は特定の専門職志向をもたない人文科学系短大の学生という構成である。学年はすべて1年生であった。調査は2回に分けて実施され，1回目の調査が1981年12月に行なわれ，翌年1月同一の被調査者に対し2回目の調査が実施された。調査は質問紙法によって行なわれ，2回の質問紙調査にすべて回答した被調査者のみが有効サンプルとして分析の対象とされた。最終的に有効データとして利用可能となったのは，看護科学生102名，保育科学生102名，人文科学系学生174名（2校の内訳は76名と98名）合計378名となった。なお2回の調査の内一方に欠席したり，記名がなかったり，回答もれがあったりの理由で不良データとして除外されたものは，全体で約11％であった。分析においては看護科学生と保育科学生は「専門群」としてまとめられ，人文科学系の「非専門群」の学生と対比される。

2 質問紙の構成

調査項目が多数であったことと，同一特性語への反応を2度求める（異なる方法を用いてではあるが）必要があったため，調査項目は2つの質問紙に分けられ，約1ケ月の期間をおいて同一被調査者に対し2回にわたって実施された。それぞれの調査において用いられた尺度は以下のとおりである。

第1回調査の項目

①自己イメージ尺度：31の形容詞対を7点法のSDスケールとして提示し，おのおの形容詞対が，現在の「学生生活における自分自身」を記述するものとして，どれだけ自分にあてはまるかの評定が求められた。この尺度は女性の職業自己イメージを測定するものとして作成された（後藤，1981；若林，他，1981）ものであるが，本調査では女子大生の自己イメージ測定の尺度として利用された。この尺度では31の形容詞対の内20対は，男性的特性（Masculinity）と女性的特性（Femininity）を両極とする，M—Fスケールから構成されていた。例えば，「たくましい—ひ弱な」「頼もしい—頼りない」「指導力のある—指導力のない」などによって代表される形容詞対がそれである。これに対し残りの11対は，特に男性的特性・女性的特性とはいえず，むしろ中性的（Neutral）で人間一般のパーソナリティ特性を両極とする，いうなればNスケールともよばれるべき形容詞対からなっていた。例えばこれらを代表する対として，「暗い—明るい」「活発な—不活発な」「積極的—消極的」などがあげられる。したがって以上の尺度は，女子大生の自己像をM—F—N特性の観点から測定しているものとみなすことができる。なお形容詞対の詳しい内容については，表1の因子分析の結果を参照されたい。

②学生生活満足度：学生生活における主要な6つの領域（友人関係，学業成績，授業内容，大学の雰囲気，クラブ活動，学生生活全体）での各人の満足度が，「とても満足」（1点）から「とても不満足」（7点）の7点法でもとめられた。

③自己能力評価尺度：NHK放送世論調査所（1979）の職業観に関する調査において用いられた「仕事が必要とする能力」についての8項目が用いられた。それらは「労働に耐えられる体力」「手先が器用なこと」「手早く仕事を仕上げる能力」「仕事をコツコツやりとげる能力」「先を見越して物事を計画的にはこぶ能力」「新しい考えを思いつく能力」「人を説得し指導する能力」「上手に人と接する能力」の8つである。本研究では，これらの能力が自分にどの程度備わっているかについて，「非常に備わっている」（1点）から「まったく備わっていない」（5点）までの，5点法による評定がもとめられた。

④学生の役割行動：学生としてのいろいろな役割上の諸活動において，各人が現在どの程度の時間や努力をそれらの行動に費しているかが，7点法（「とても時間や努力を費している」—1点から「まったく時間や努力を費していない」—7点まで）によって調べられた。学生の役割行動の領域としては，勉強，対人関係，人格陶冶，自由行動の4つが考慮され，各領域から5項目づつ，合計20項目が用意された。詳しい項目内容については，表6の因子分析の結果を参照されたい。

⑤職業志向：人びとが職業生活をつうじて達成しようとしている10の課題の中から，学生が将来職業人となったとき自分にとって重要となると思われる項目の選択がもとめられた。具体的には，「将来の職業生活の上で私にとって最も重要であるもの」1つ，「かなり重要であるもの」2つ，「最も重要でないもの」1つ，「それほど重要でないもの」2つが選択された。また，「最も重要なもの」と答えた事柄を実現するのに，現在自分が学んで

いることが実際どの程度役に立つと思うかについて，「まったく役にたたない」（1点）から「非常に役にたつ」（5点）までの，5点法で評定がもとめられた。

⑥進路選択：職業継続意志と希望職業の2つが調べられた。職業継続意志については，「結婚したらやめたい」「子供ができたらやめたい」「子供の小さい間は育児に専念し，手がはなれたら再就職したい」「ずっと働き続けたい」の内から1つを選ぶことがもとめられた。希望職業については，女性が多く進出している23の職種から第1希望，第2希望の2つを選択することがもとめられた。

⑦大学志望理由：日本教育学会入試制度研究委員会（1978）の調査を参考にしてどのような理由で現在の大学に入学したかが，12の要因に関して調査された。質問は大学を選んだ時，これらの要因をどの程度考えに入れたか（「よく考えに入れた」―1点から「全く考えに入れなかった」―5点まで）という観点から行なわれた。問題とされた要因は学業成績，模試の成績，自分の興味・関心，親の職業，家庭の経済力，この大学の評判，自分のなりたい職業，通学距離，家族の意見，先生の意見，友だちの意見，共通一次試験がないこと，の12である。なおこの質問に加え，現役か浪人か，この大学への進学が第1志望かどうか，の2つについても回答がもとめられた。

第2回調査の項目

①社会的役割態度：女性の社会的役割に対する態度が，7点法のリッカートタイプ・スケールによって調べられた。この尺度はGump（1972）の性役割態度や久世ら（1977）の社会的態度の研究を参考に，若林ら（1981）によって作成されたものである。尺度の内容として，現代社会における女性の役割が，家庭・職業・政治・文化・地域社会などの役割領域を代表する31のステートメントによって表示された。これらのステートメントは，伝統主義的な女性の社会的役割を主張するもの（女性は政治などに口出しすべきではない，女性は専門的知識の必要な仕事には適していない，など）と，進歩主義的役割を主張するもの（男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である，男性に適した仕事女性に適した仕事という区別はもともと存在しない，など）を約半数ずつ含んでいた。これらの意見に対する支持の度合が，「非常に反対」（1点）から「非常に賛成」（7点）の7点尺度によって調査された。なお，31項目の詳しい内容については，表5の因子分析の結果を参照されたい。

②性役割タイプ尺度：この尺度は性役割タイプの4分類を行なうために必要な，masculinityとfemininityの相互に独立した次元をうる目的で構成された。学生は62個の自己像記述特性語を用い，「学生生活における自分自身」を評定することをもとめられた。評定はおのおのの特性語が，現在の自分自身を記述するのにどの程度あてはまるかという観点から，7点法（「非常にあてはまる」―1点から，「非常にあてはまらない」―7点まで）で行なわれた。これら62の特性語は，第1回調査で用いられた31対の自己イメージSDスケールの両極語（例えば「活発な―不活発な」）を，1つ1つの独立した次元（例えば「活発な」と「不活発な」）にバラすことによって得られたものである。先の自己イメージ尺度の説明から了解されるとおり，62個の特性語の内，20個は男性的特性（masculinity）を，他の20個は女性的特性（femininity）を，そして残りの22個は中性的特性（neutrality）を表示するものであった。これら62個の特性語は12のブロックにランダムに配置され，学生はそれぞれのブロック（各ブロックは5つから6つの特性語を含む）に，順を追って回答していくことが依頼された。このような配慮は評定における疲労と，近接や対比による評定バイアスを，できるだけ防止しようとする意図から行なわれたものである。また，自己イメージ尺度と性役割タイプ尺度の評定が，約1ケ月の間隔をおいて別々に実施されたのも，同様な理由からである。性役割タイプ尺度においては，男性特性20項目と女性特性20項目との相関表から，相互に無相関な男性特性・女性特性を選び出すことが第1の目的となる。そしてこの結果から，androgynous，masculine，feminine，undifferentiatedという性役割の4類型が導出されることになる。第2の目的は，特性語を両極のSDスケールとして用いた場合と，それをバラした単極スケールとして用いた場合の，因子構造と特性項目の因子負荷量の布置を比較検討することである。もし両分析において因子構造が基本的に同一で，かつ単極尺度の分析結果において対極特性語が相互に異符号で同一因子に布置してくるとすれば，特性語間の対極性は一応保証されたことになろう。また因子分析の結果からは，先の若林ら（1981）の報告から予想されるとおり，「力強さ」「親しみやすさ」「社交性」「細やかさ」の4因子が抽出されることが期待される。

③大学との一体感：大学との一体感に関する単独の3つの質問項目が用意された。第1はこの大学に対する「好感度」であり，「まったく好感がもてない」（1点）から「非常に好感がもてる」（7点）まで，7点法での評定がもとめられた。第2は「大学の雰囲気」に対するとけ込み具合で，「ぜんぜんとけこんでいない」（1点）から「非常にとけこんでいる」（5点）まで，5点法での評定が行なわれた。最後は「大学生活に対する信頼感」であり，現在の学生生活を続けていった場合，将来どのような事態が予想されるかが，次の4つの選択肢の内から

一つを選ぶ形式で問われた。1－こまったことになるのでいつかは転換が必要だと内心思っている，2－自分の考えている方向とずれてしまうかもしれないが結果的にはなんとかうまくいくだろうと思う，3－だいたい自分の考えている方向に進めると思う，4－自分の希望する分野で十分活躍できると思う，の4つである。

以上2回の質問紙調査にもり込まれた質問項目は，大別すると①現在の大学への入学を規定した要因，②大学内での活動や大学に対する態度・適応に関する質問項目，③自己像や自己能力の評価に関する項目，④職業志向や女性の社会的役割に対する態度項目の4つに分類できる。これらの項目群は，短大という教育機関における女性の職業社会化過程を，その「入口」（入学を規定した要因）と「中間プロセス」（学生生活の質や大学への適応）および「出口」（職業志向や職業選択）の3局面においてとらえようとする試みから発したものである。このパラダイムにおいては，上記の3局面をつうじての女性自身の変化，すなわち職業自我同一性の形成や自己能力の有効性に関する信念の確立過程の記述と，この過程を規定する要因の解明に研究の焦点がそそがれる。本研究では，このような発達的パラダイムに基づく女性の職業社会化研究の出発点として，心要とされる各種尺度の構成と，これら尺度間の相関的関係のネットワークの基本的姿が吟味される。

Ⅲ　結果1――尺度の検討

われわれは先の研究（若林，他，1981）において，職業人としての自己概念を測定するための尺度を検討した。この尺度は，男性によくみられる特性，女性によくみられる特性，どちらともいえない中性的特性の間で，反対語を対にしたSDスケールとして構成されていたが，31項目のうち，男性特性－女性特性の対は20個であった。この尺度によって，働く婦人とその配偶者，女子短大生および男子大学生を対象に，職業人としての自己イメージおよび期待される女性のイメージについて評定を求めた。その結果，「力強さ」「親しみやすさ」「社交性」「細やかさ」の4因子が抽出された。これらの因子は，一方でmasculinity－femininity の次元と humanity の次元，他方ではOsgood，et al.（1957）によって明らかにされた，評価，活動性，力量性の3次元を統合する尺度として構成されたものであった。従来の性役割研究においては，masculinity と femininity とを1次元とみなすか，あるいは独立した2次元とみなすか，また中性的な humanity の次元を含めるか否かなど研究者により立場の違いがみられた。しかし評価，活動性，力量性の次元を組み込んだ研究はみられていない。われわれの研究は，性役割を単純なmasculinity—femininity の次元だけで捉えることは不十分であり，性役割とは無関係に見出されてきた一般的な対人認知構造の諸次元との統合をはかることが必要であることを示唆した。

われわれの用いた尺度は，反対語と思われる特性語を対にした両極尺度であった。そして，これらのうちの多くは，男性特性－女性特性という組み合わせであった。したがって個人の masculinity－femininity を測定しようとする場合，Masculinity 得点（M得点）とFemininity 得点（F得点）とは，一方が高ければ他方は低いという関係にある。しかし上述のように，masculinity と femininity とが一次元上の対極でなく，相互に独立の2つの次元をなすという立場がある。Bem (1974) やSpence，et al.（1975）はこのような立場から，両特性を兼ね備えている，あるいは状況によってmasculine の特性をもfeminine の特性をも発揮できるタイプが存在すると考え，これを "androgyny" という概念によって定義づけた。そして，これが単なる概念ではなく，行動の予測性を伴ったものであることを明らかにしている。

そこで本研究では，結果2で述べるように，masculinity と femininity とを独立の次元と考え，両次元の組み合わせから個人を4つの性役割タイプに分けるため，単極型の尺度を作成した。この目的のため，先の研究で用いられた31項目からなる両極尺度の対極に位置している特性語をバラバラにした62項目の単極尺度（7点法）が構成された。この尺度からは2つのことが期待された。第1は，相互に独立な男性特性と女性特性に係わる形容詞群を選び出し，M得点・F得点算出の基礎とすることである。第2は，両極のSD尺度と，それをバラバラにした単極尺度との関係を検討し，両者の間に特性語の対極性や因子構造に関し，一貫した関係があることを明らかにすることである。このため一定期間をおき，同一被調査者に対し，両極型尺度と単極型尺度の両方を実施した。

以下ではこれら尺度の検討に加え，本研究で用いられた他の尺度の因子分析の結果についても，簡単に述べることにする。

1　両極型尺度の因子構造

まず始めに，先の研究で用いられた31対の両極型職業自己イメージ尺度について検討する。前回同様，全サンプルにもとづいて，主因子法（バリマックス回転）による因子分析が行なわれた。いくつかの因子構造について検討したが，先の研究と同様の4因子構造がもっとも妥当なものと判断された。表1は，結果にもとづいて，各

表1　両極型M－F－N尺度の因子分析の結果（N＝399）

項目 ＼ 因子	第Ⅰ因子 力強さ	第Ⅱ因子 親しみやすさ	第Ⅲ因子 社交性	第Ⅳ因子 細やかさ	共通性 (h^2)
3 決断力のある－決断力のない	**.58**	.01	−.13	−.03	.35
25 自主的－依存的	**.66**	−.09	−.06	−.09	.45
30 積極的－消極的	**.59**	−.07	−.36	.26	.55
16 頼もしい－頼りない	**.67**	−.10	−.10	−.02	.47
23 意志強固な－意志薄弱な	**.48**	−.12	−.04	−.07	.25
8 弱い－強い	**−.63**	.01	.07	−.14	.42
21 たくましい－ひ弱な	**.48**	−.12	−.03	.30	.33
28 視野の広い－視野の狭い	**.45**	−.17	−.35	.02	.35
1 活発な－不活発な	**.41**	−.14	−.33	.13	.32
20 指導力のない－指導力のある	**−.52**	.06	.28	.09	.36
26 線の太い－線の細い	**.39**	−.04	−.03	.32	.26
2 理性的－感情的	**.06**	−.08	.13	−.16	.05
13 野心のある－野心のない	**.38**	−.02	−.16	.07	.18
22 冷たい－暖い	−.00	**.66**	.35	−.02	.56
5 親切な－不親切な	.12	**−.54**	−.12	−.04	.32
18 誠実な－不誠実な	.22	**−.48**	.12	−.18	.33
29 暗い－明るい	−.33	**.34**	.43	−.31	.51
15 非家庭的－家庭的	−.03	**.52**	.03	.16	.30
14 地味な－派手な	−.09	−.07	**.70**	−.10	.52
24 非社交的－社交的	−.36	.21	**.56**	−.33	.59
11 やぼな－おしゃれな	−.17	.07	**.64**	.10	.45
6 無口な－おしゃべりな	−.27	.14	**.43**	−.38	.42
7 おおまかな－繊細な	.01	.23	.16	**.64**	.47
17 雑な－細やかな	.00	.31	.15	**.64**	.53
12 おおらかな－気持のこまかい	.09	.03	−.02	**.53**	.29
4 頭の悪い－頭のよい	−.24	.12	.12	.24	.15
9 まじめな－ふまじめな	.14	−.38	.21	−.41	.38
10 外向的－内向的	.44	−.07	−.51	.44	.65
19 楽観的－悲観的	.17	−.03	−.21	.49	.31
27 魅力のない－魅力のある	−.28	.09	.58	.10	.44
31 粗野な－優雅な	−.13	.13	.44	.33	.34
分散（%）	4.18 (35.10)	1.87 (15.70)	3.20 (26.87)	2.66 (22.33)	

因子尺度ごとに因子負荷量の絶対値が高い項目から順に並べ，今回の分析で得られた因子負荷量を示したものである。

全般的にみれば先の研究の結果とよく対応しており，「力強さ」「親しみやすさ」「社交性」および「細やかさ」とそれぞれ解釈される4因子構造が認められた。また，各尺度に含まれると判断される項目も大部分は重複している。しかしながら，部分的にはいくつかの違いがみられる。まず第1に，各因子によって説明される分散の割合が異なっている。「力強さ」の因子で説明される分散の割合は，先の研究では，職業人としての自己イメージにおいて45.63 %，職場の同僚として期待される女性イ

メージにおいては52.28 %であったのに対し，本研究では35.10 %と低くなっている。「親しみやすさ」の因子で説明される分散の割合も先の研究でより高く，本研究では15.70 %であるのに対し，職業人としての自己イメージでは19.17 %，期待される女性のイメージでは29.69 %となっている。これらとは逆に「社交性」の因子と「細やかさ」の因子については，本研究の方で説明される分散の割合が高くなっている。「社交性」の因子では，本研究で26.87 %，職業人としての自己イメージで20.28 %，期待される女性のイメージで9.30 %であり，「細やかさ」の因子についてはそれぞれ，22.33 %，14.93 %，8.73 %となっている。このような差異については，後ほど詳しくふれる。

次に，各因子尺度に含まれる項目の差異をみてみよう。先の研究では複数の因子に同程度の負荷量をもっていたため，それが属する因子尺度を特定できなかった「魅力のない—魅力のある」と「粗野な—優雅な」が，いずれも「社交性」の因子に属している。したがって本研究での「社交性」の因子は，「魅力性」あるいは「洗練性」が加味されたものとなっている。また本研究では「楽観的—悲観的」の項目が「細やかさ」の因子に含まれることが明らかである。その他，この因子に高く負荷している項目が，「外向的—内向的」，「まじめな—ふまじめな」，「無口な—おしゃべりな」，「非社交的—社交的」などであることを考えると，本研究での「細やかさ」が「神経質な細やかさ」とでも言うべきものであることがわかる。これは，先の研究における期待される女性のイメージにおいて，純粋な「細やかさ」の因子が得られたことと異なっている。

2　単極型尺度の因子構造

両極型SD尺度の対をなす特性をバラバラにした単極型M—F—N尺度が，どのような因子構造をもっているかを検討する。このため，全サンプルにもとづき，主因子法（バリマックス回転）を用いて因子分析を行なった。いくつかの因子を抽出して検討した結果，4因子構造がもっとも斉合的で明確な意味次元をもつことが明らかにされた。表2にその結果が示されている。ここでは，当該因子に対して絶対値が0.40以上の因子負荷量をもち，しかも他の因子に対し低い負荷量しかもたないという基準によって，各因子尺度に含まれる項目を選択し，基準を満たさない項目は残余項目とした。

第1因子は，内向的，非社交的，無口な，不活発な，地味ななどの項目で負の高い負荷量が得られており，社交性の因子といえるだろう。次に第2因子に負荷量の高い項目をみると，強い，決断力のある，頼もしいなどで

表2　単極型M－F－N尺度の因子分析の結果

（N＝378）

項目＼因子	第Ⅰ因子 社交性	第Ⅱ因子 力強さ	第Ⅲ因子 親しみやすさ	第Ⅳ因子 細やかさ	共通性 (h^2)
24 非社交的	**−.71**	−.11	.24	.05	.57
41 内向的	**−.71**	−.31	.02	.05	.61
10 外向的	**.66**	.29	−.02	−.03	.52
6 無口な	**−.65**	−.17	.08	.11	.48
55 社交的	**.65**	.24	−.08	.07	.49
34 不活発な	**−.64**	−.35	.10	−.01	.54
14 地味な	**−.64**	−.05	−.09	−.17	.45
1 活発な	**.62**	.37	.03	−.01	.53
39 おしゃべりな	**.62**	.12	−.01	−.09	.41
45 派手な	**.60**	.07	.08	.24	.43
44 おしゃれな	**.52**	.12	−.07	.32	.39
37 強い	.16	**.70**	−.03	−.13	.54
3 決断力のある	.25	**.65**	−.08	.12	.51
16 頼もしい	.19	**.64**	−.14	.02	.47
49 頼りない	−.23	**−.63**	.22	.05	.50
21 たくましい	.05	**.61**	−.01	−.19	.41
32 決断力のない	−.24	**−.60**	.10	−.06	.44
51 指導力のある	.33	**.59**	−.09	.08	.47
25 自主的	.25	**.56**	.02	.12	.39
52 意志薄弱な	−.11	**−.55**	.19	−.03	.35
8 弱い	−.26	**−.52**	.21	.12	.40
20 指導力のない	−.26	**−.50**	.05	−.15	.35
23 意志強固な	−.06	**.47**	.01	.02	.22
56 依存的	−.02	**−.46**	.08	−.01	.21
28 視野の広い	.17	**.45**	−.12	.15	.26
59 視野の狭い	−.19	**−.41**	.22	−.11	.27
36 不親切な	−.16	−.03	**.73**	−.17	.59
47 不誠実な	.06	−.15	**.63**	−.08	.43
22 冷たい	−.21	.14	**.62**	−.04	.45
5 親切な	.15	.09	**−.61**	.21	.45
18 誠実な	−.07	.24	**−.51**	.16	.34
46 家庭的	.02	.13	**−.50**	.16	.29
53 暖い	.24	.04	**−.47**	.05	.28
15 非家庭的	−.03	−.03	**.41**	−.11	.18
48 細やかな	.01	.01	−.21	**.66**	.48
38 繊細な	−.06	.05	−.13	**.61**	.39
43 気持のこまかい	.02	.00	−.29	**.58**	.42
62 優雅な	−.20	.28	−.12	**.53**	.42
7 おおまかな	.04	−.02	.21	**−.46**	.26
2 理性的	.00	.36	−.20	.28	.25
4 頭の悪い	−.08	−.32	.21	−.20	.19
9 まじめな	−.44	.20	−.34	.19	.38
11 やぼな	−.34	−.10	.22	−.24	.23
12 おおらかな	.36	.13	−.24	−.06	.21
13 野心のある	.07	.38	.20	.03	.19
17 雑な	.08	−.06	.37	−.43	.32
19 楽観的	.35	.07	−.06	−.29	.21
26 線の太い	.13	.48	−.03	−.32	.35
27 魅力のない	−.36	−.27	.14	−.38	.36
29 暗い	−.52	−.19	.36	.02	.44
30 積極的	.49	.48	.04	.03	.47
31 粗野な	−.00	−.05	.39	−.37	.29
33 感情的	.14	.04	.10	−.10	.04
35 頭のよい	.08	.42	−.12	.34	.31
40 ふまじめな	.38	−.31	.41	−.21	.45
42 野心のない	−.13	−.38	−.10	−.09	.18
50 悲観的	−.29	−.24	.26	.24	.27
54 ひ弱な	−.12	−.39	.21	.27	.28
57 線の細い	−.03	−.30	.03	.45	.29
58 明るい	.59	.22	−.36	−.02	.53
60 魅力のある	.38	.34	−.13	.39	.43
61 消極的	−.50	−.50	.06	.04	.52
分散（%）	7.60 (32.51)	7.68 (32.85)	4.39 (18.78)	3.71 (15.87)	

あり，力強さの因子と名付けられる。第3因子に高い負荷量をもつ項目は，不親切な，不誠実な，冷たい，家庭的などであり，humanity または親しみやすさの因子といえよう。最後に第4因子尺度に含まれる項目は，細やかな，繊細な，気持の細かいなどとなっており，細やかさの因子と名付けられる。

以上のように，単極型のM－F－N尺度は両極型のM－F－N尺度と同様の，社交性，力強さ，humanityまたは親しみやすさ，そして細やかさの4因子からなる構造を有していることが明らかにされた。

3　両極型尺度と単極型尺度との比較

両極型尺度，単極型尺度ともに，力強さ，親しみやすさ，社交性および細やかさの4因子構造をもつことが明らかにされたが，次に，対をなす特性がこれら因子の上に有意味な対極性をもって出現してきているか否かを検討する。

表3は，両極型尺度の因子分析の結果にもとづいて特性語を対にして並べ，両極尺度と単極尺度での因子負荷量を比較したものである。これによると，全般的にみれば，対をなす特性は，両極型のSDフォーマットにもとづこうが，単極型のリッカートスケールのフォーマットにもとづこうが，概して同じ因子尺度に属していることがわかる。しかし個々の項目をみると，次のような項目で対の間に差異がみられる。まず力強さの因子に含まれる項目では，たくましいと対をなしているひ弱なが，力強さの因子にあまり大きく負荷しておらず，細やかさへの負荷がある程度みられている。また，線の太いと対をなしている線の細いは，力強さよりもむしろ細やかさへの負荷が強くなっている。次に，親しみやすさの因子については全項目がこれへの高い負荷を示しており，対の間の不一致はみられない。社交性の因子に含まれる対では，おしゃれなと対をなすやぼなの負荷量があまり高くない。魅力のある—魅力のないは，両極尺度では社交性に高く負荷しているが，単極尺度では共に細やかさへの負荷も同程度に高くなっている。また優雅な—粗野なも社交性への負荷量は低く，むしろ細やかさへ高く負荷している。次に，細やかさの因子では，気持の細かいと対をなすおおらかなが，細やかさへは殆んど負荷しておらず，社交性や親しみやすさの因子への負荷量の方が高くなっている。最後に両極尺度では，社交性，力強さ，細やかさの3因子に同程度の負荷量をもっていた内向的—

表3　自己像記述特性語の因子分析：単極フォーマットによる場合と両極フォーマットによる場合の比較

	単極フォーマットによる性役割タイプ・スケール					両極フォーマットによる自己イメージ・スケール				
	Ⅰ 社交性	Ⅱ 力強さ	Ⅲ 親しみやすさ	Ⅳ 細やかさ	h^2	Ⅰ 力強さ	Ⅱ 親しみやすさ	Ⅲ 社交性	Ⅳ 細やかさ	h^2
頼もしい	19	**64**	−14	02	47					
頼りない	−23	**−64**	22	05	50	**67**	−10	−10	02	47
自主的	25	**56**	02	12	38					
依存的	−02	**−46**	08	−01	21	**66**	−09	−06	−09	45
強い	16	**70**	−03	−13	54					
弱い	−26	**−52**	21	12	40	**−63**	01	07	−14	42
積極的	49	**48**	04	03	47					
消極的	−50	**−50**	06	04	51	**59**	−07	−36	26	55
決断力のある	25	**65**	08	12	51					
決断力のない	−24	**−60**	10	−06	44	**58**	01	−13	−03	35
指導力のある	33	**59**	−09	08	47					
指導力のない	−26	**−50**	05	−15	35	**−52**	06	28	09	36
意志強固な	−06	**47**	01	02	22					
意志薄弱な	−11	**−55**	19	−03	35	**48**	−12	−04	−07	25
たくましい	05	**61**	−01	−19	41					
ひ弱な	−12	**−39**	21	27	28	**48**	12	−03	30	33
視野の広い	17	**45**	−12	15	26					
視野の狭い	−19	**−41**	22	−11	27	**45**	−17	−35	02	35

活発な	62	**37**	03	−01	53					
不活発な	−64	**−35**	10	−01	54	**41**	−14	−33	13	32
線の太い	13	**48**	−03	−32	35					
線の細い	−03	**−30**	03	45	29	**39**	−04	−03	32	26
野心のある	07	**38**	20	03	19					
野心のない	−13	**−38**	−10	−09	18	**38**	−02	−16	07	18
暖い	24	04	**−47**	05	28					
冷たい	−21	14	**62**	−04	45	−00	**66**	35	−02	56
親切な	15	09	**−61**	21	45					
不親切な	−16	−03	**73**	−17	59	12	**−54**	−12	−04	32
家庭的	02	13	**−50**	16	29					
非家庭的	−03	−03	**41**	−11	18	−03	**52**	03	16	30
誠実な	−07	24	**−51**	16	34					
不誠実な	06	−15	**63**	−08	43	22	**−48**	12	18	33
地味な	**−64**	−05	−09	−17	45					
派手な	**60**	07	08	24	43	−09	−07	**70**	−10	52
やぼな	**−34**	−10	22	−24	23					
おしゃれな	**52**	12	−07	32	39	−17	07	**64**	10	45
社交的	**65**	24	−08	07	49					
非社交的	**−71**	−11	24	05	57	−36	21	**56**	−33	59
おしゃべりな	**62**	12	−01	−09	41					
無口な	**−65**	−17	08	11	48	−27	14	**43**	−38	42
魅力のある	**38**	34	−13	39	43					
魅力のない	**−36**	−27	14	−38	36	−28	09	**58**	10	44
優雅な	**20**	28	−12	53	42					
粗野な	**−00**	−05	39	−37	29	−13	13	**44**	33	34
おおまかな	04	−02	21	**−46**	26					
繊細な	−06	05	−13	**61**	39	01	23	16	**64**	47
細やかな	01	01	−21	**66**	48					
雑な	08	−06	37	**−43**	32	00	31	15	**64**	53
おおらかな	36	13	−24	**−06**	21					
気持の細かい	02	00	−29	**58**	42	09	03	−02	**53**	29
楽観的	35	07	−06	**−29**	21					
悲観的	−29	−24	26	**24**	27	17	03	21	**49**	31
残余アイテム										
頭のよい	08	42	−12	34	31					
頭の悪い	−08	−32	21	−20	19	−24	12	12	24	15
まじめな	−44	20	−34	19	38					
ふまじめな	38	−31	41	−21	45	14	−38	21	−41	38
外向的	66	29	−02	−03	52					
内向的	−71	−31	02	05	61	44	−07	51	44	65
理性的	00	36	−20	28	25					
感情的	14	04	10	−10	04	06	−08	13	−16	05
明るい	59	22	−36	−02	53					
暗い	−52	−19	36	02	44	−33	34	43	−31	51

注）それぞれの数値は100倍してある。

外向的が単極尺度では社交性に高い負荷量を示している。

このように，全般的にみれば，対極をなす2つの特性の因子負荷量のパターンの類似性は高いが，中には両者がかなり異なっている対もみられる。このような対極性に疑問のある形容詞対は，親しみやすさの因子ではまったくみられなかったが，社交性や細やかさの因子ではいくつか見い出された。

では次に，対をなす2特性間の積率相関係数から，対の対極性を検討してみよう。表4がその結果である。当然のことながら，全体的には負の有意な相関となっている。個々の項目をみると，決断力のある―決断力のない，非家庭的―家庭的，活発な―不活発な，親切な―不親切な，野心のある―野心のない，といった対で特に高い負の相関がみられる。これらの対は，一方の特性語が他方の特性語を否定する言葉から構成されているために，対極性が明確になっているのであろう。これらの対では因子負荷量のパターンも両特性間で類似している。これに対して，おおらかな―気持のこまかいではほぼ0に近い相関となっており，理性的―感情的の相関もあまり低くない。その他，粗野な―優雅な，おおまかな―繊細な，自主的―依存的，などで対極性が曖昧となっている。因子間の比較をすると，細やかさの因子での対極性が，他の因子にくらべて弱くなっている。

表4　対をなす特性間の相関係数

因子	対	相関
力強さ	決断力のある－決断力のない	−.77
	自主的－依存的	−.29
	積極的－消極的	−.54
	頼もしい－頼りない	−.55
	意志強固な－意志薄弱な	−.32
	強い－弱い	−.54
	たくましい－ひ弱な	−.36
	視野の広い－視野の狭い	−.63
	活発な－不活発な	−.73
	指導力のある－指導力のない	−.63
	線の太い－線の細い	−.49
	理性的－感情的	−.13
	野心のある－野心のない	−.70
親しみやすさ	冷たい－暖い	−.34
	親切な－不親切な	−.72
	誠実な－不誠実な	−.57
	暗い－明るい	−.59
	非家庭的－家庭的	−.74
社交性	地味な－派手な	−.64
	非社交的－社交的	−.63
	やぼな－おしゃれな	−.43
	無口な－おしゃべりな	−.69
細やかさ	おおまかな－繊細な	−.29
	雑な－細やかな	−.32
	おおらかな－気持の細かい	.04
残余項目	頭の悪い－頭のよい	−.64
	まじめな－ふまじめな	−.68
	外向的－内向的	−.60
	楽観的－悲観的	−.48
	魅力のない－魅力のある	−.65
	粗野な－優雅な	−.23

4　その他の尺度の因子構造

本研究で用いられたM－F－N尺度以外の尺度の因子分析の結果について簡単に述べる。まず女性の社会的役割態度の尺度を因子分析（主因子法，バリマックス回転）したところ，次の3因子構造が得られた。表5に各因子への負荷量を示した。第1因子は負荷量の高い項目の内容から判断すると，社会，政治，仕事といった領域における男女平等主義に関するものであり，「社会参加の平等性」と名付けられよう。第2因子は家庭における伝統的な女性の役割に関するものであり，「家庭を守る伝統主義」と解釈される。そして第3因子は家事や育児に関する男女平等主義であり，「家庭内分業の平等性」と名付けられる。このような3因子は，先の研究（若林，他，1981）で見い出されたものと同じである。

次に学生生活における諸活動について，時間や努力を費している程度を評定させたものについてみてみよう。同様に，主因子法（バリマックス回転）による因子分析をしたところ，2因子構造が見い出された。表6がその結果である。第1因子は同僚，先輩，その他の人々との対人関係に関するものであり，「対人関係」の因子と解釈された。第2因子は学業や教養に関するものであり，「人格陶冶」の因子と考えられる。

8種の能力に関して自己評価を求めた結果についても因子分析を試みたが，有意味な因子にまとまらなかった。なお表7に，各尺度の因子分析によって得られた因子に含まれる項目の平均値，能力についての自己評価の全項目平均値，および学生生活に関する満足度の全項目平均値の間の積率相関係数を示した。

表 5　社会的役割尺度の因子分析結果（N＝378）

番号	項目 ＼ 因子	第Ⅰ因子 社会参加の平等性	第Ⅱ因子 家庭を守る伝統主義	第Ⅲ因子 家庭内分業の平等性	共通性 (h^2)
10.	女性は何らかの社会参加をつうじて家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである。	**.70**	.09	.11	.50
17.	家庭のことに真剣に取り組んでいれば，主婦は社会や政治の動きなどまったく気にならないはずである。	**−.62**	.01	−.05	.38
3.	女性は政治などに口出しすべきではない。	**−.60**	.09	−.13	.39
19.	自分が一人の職業人として生きているという自覚は，男女を問わず大きな喜びである。	**.59**	.06	.05	.35
30.	自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは，女性としての義務の一つである。	**.58**	−.03	.16	.37
8.	男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である。	**.57**	.01	.11	.34
2.	仕事に打ち込んでいる女性は魅力的である。	**.50**	−.01	.01	.25
18.	女性には家庭を守り子どもを育てること以上に，重要な役割は期待されていない。	**−.49**	.13	−.15	.28
12.	女性は専門的知識の必要な仕事には適していない。	**−.49**	.17	−.17	.29
23.	職場で男性と同じように頑張って働かねばならない女性は，結局不幸な女性といわねばならない。	**−.49**	.11	−.09	.26
26.	女性は家庭を持っていても，夫や子供に寄りかかって生きてゆくべきではない。	**.41**	−.15	.10	.20
27.	女性が家庭にとじこもりそこでのささやかな幸福に甘んじていれば，社会からとり残されるだけである。	**.37**	−.17	.07	.17
4.	もともと女性は男性に比べ，仕事に必要な能力が劣っている。	**−.37**	.17	−.09	.18
1.	良い妻，良い母親になることが女性にとって人生最大の目的である。	−.15	**.59**	−.09	.38
13.	家庭がみんなのいこいの場とならなければ，主婦としては失格である。	.17	**.56**	−.08	.35
16.	女性が外で働く場合は，家族に迷惑や不都合をかけない範囲にしておくべきだ。	−.14	**.55**	−.18	.36
25.	女性がいかに成功しても女性本来の喜びである愛情や献身の生活が犠牲となるならば，真の幸福を味うことはできない。	−.06	**.51**	−.06	.26
5.	夫が外で働き妻が家にいて家事を行うという形は，男女のそれぞれの特性にかなったものである。	−.32	**.46**	−.08	.32
28.	女性は仕事を持っているからといって，自分の夫に掃除や皿洗いなど，だんじてさせるべきではない。	−.13	.30	**−.74**	.65
20.	夫が食事を作ったり，育児や掃除の手伝いをすることはごく自然の姿である。	.22	−.17	**.72**	.59
22.	男の子にも女の子にも，平等に家事を手伝わせるべきである。	.34	−.10	**.61**	.50
6.	婦人の地位向上などの女性運動に積極的な関心を持つよりも，主婦としての仕事に専念したほうが良い。	−.48	.48	−.24	.52
7.	必要なときは，女性が家庭より仕事を優先させることがあってもしかたがない。	.23	−.12	.11	.08
9.	育児はすべて母親の責任であり，他人にはまかせられない。	−.18	.19	−.24	.13

11.	女性にとって，理屈や教養よりもかわいさや素直さのほうが大切である。	−.31	.52	−.10	.38
14.	女性は近隣の出来事や子供の生活環境を守るための地域活動の原動力とならなければならない。	.21	.39	.11	.20
15.	男性に適した仕事，女性に適した仕事という区別はもともと存在しない。	.09	−.30	.09	.11
21.	女性にとって良き妻，良き母親として生きることよりも一人の人間として生きることの方がもっと大切である。	.28	−.27	.23	.20
24.	女性が仕事を持てば，夫や子供たちは，各人の責任を自覚するようになり，かえって家庭に望ましい影響を与える。	.41	−.25	.25	.30
29.	家庭が円満かどうかは主婦だけでなく夫，子供，両親等家族全員が平等に責任を負うべきことである。	.48	.08	.25	.30
31.	お茶やお花などのおけいこ事は，女性のたしなみとして身につけるべきである。	.07	.28	−.17	.11
	分　散（%）	4.96 (51.08)	2.74 (28.22)	2.01 (20.70)	

表6　学生の役割行動尺度の因子分析結果（N＝378）

番号	項目 ＼ 因子	第Ⅰ因子 対人関係	第Ⅱ因子 人格陶冶	共通性 (h^2)
19.	学外のいろんな人たちと交際すること。	**.78**	.03	.61
7.	できるだけ，多くの友人とつきあうこと。	**.73**	.02	.54
11.	大学内の友人たちと，飲んだり，食べたりすること。	**.63**	−.05	.40
16.	学生というワクにとらわれず，広く活動すること。	**.51**	.23	.31
20.	旅行・スポーツ・映画など，自由な時間をエンジョイすること。	**.50**	−.01	.25
15.	クラブや同好会，学部の先輩やＯＢなどと，知りあいになること。	**.45**	.12	.22
5.	図書館で文献を読んだり，資料を調べたりすること。	−.07	**.57**	.33
6.	政治や社会・文化など，社会の出来事に精通すること。	.10	**.56**	.32
13.	授業の予習や復習をすること。	−.14	**.54**	.31
17.	良い成績をとること。	.11	**.54**	.30
10.	自分の専門や，興味ある領域の本を読むこと。	.09	**.48**	.24
9.	先生や研究室の人たちと広くつきあうこと。	.10	**.42**	.18
1.	授業をさぼらず，できるだけ出席すること。	−.03	.20	.04
2.	自分の個性をできるだけのばすこと。	.38	.44	.34
3.	大学の行事（スポーツ祭，学校祭など）に積極的に参加すること。	.23	.32	.16
4.	バイトに精を出すこと。	.23	.01	.05
8.	だれにもわずらわされず，自分だけの自由な時間を持つこと。	.20	.26	.11
12.	将来など気にせず，一人気のむくままに生活すること。	.09	.03	.01
14.	人間的に成長すること。	.44	.41	.36
18.	教養を高め，趣味を豊かにすること。	.36	.58	.46
	分　散（%）	2.94 (52.97)	2.61 (47.03)	

表7　本研究で用いられた尺度の下位尺位度間相関

下位尺度		両極型M－F－N尺度				学生生活への満足度	役割行動		社会的役割			単極型M－F－N尺度			能力の自己評価
		力強さ	親しみやすさ	社交性	細やかさ		対人関係	人格陶冶	社会・平等	家庭・伝統	家庭・平等	M特性	F特性	N特性	
両極型尺度	力強さ	1.00													
	親しみやすさ	0.24**	1.00												
	社交性	0.55**	0.28**	1.00											
	細やかさ	−0.15**	0.21**	−0.11*	1.00										
学生生活への満足度		0.20**	0.26**	0.19**	−0.05	1.00									
行動	対人関係	0.37**	0.13*	0.49**	−0.17**	0.16**	1.00								
	人格陶冶	0.27**	0.13*	0.05	0.08	0.20**	0.12*	1.00							
社会的役割	社会・平等	0.05	−0.09	−0.09	−0.12*	−0.13*	−0.03	0.10	1.00						
	家庭・伝統	−0.03	0.24**	0.04	0.04	0.17**	0.04	−0.11*	−0.27**	1.00					
	家庭・平等	0.01	−0.12*	−0.06	−0.02	−0.04	−0.09	0.10*	0.41**	−0.35**	1.00				
単極型尺度	M特性	0.76**	0.13*	0.36**	−0.12*	0.18**	0.28**	0.27**	0.10	−0.06	0.10	1.00			
	F特性	0.35**	0.37**	0.62**	0.20**	0.09	0.31**	0.14**	−0.14**	0.09	−0.05	0.33**	1.00		
	N特性	0.57**	0.43**	0.53**	−0.03	0.26**	0.31**	0.26**	−0.03	0.08	−0.02	0.56**	0.53**	1.00	
能力の自己評価		0.53**	0.24**	0.42**	0.03	0.16**	0.24**	0.20**	0.01	0.03	0.00	0.49**	0.42**	0.49**	1.00

*p <.05，　**p <.01

5　討　論

自己イメージに関するM－F－N尺度は，「力強さ」「親しみやすさ」「社交性」および「細やかさ」の4因子からなる構造をもっていることが明らかにされた。これはわれわれの先の研究（若林，他，1981）の結果とよく一致している。先の研究では「職業人としての自己」および「（職場の同僚として）期待される女性」という概念が用いられ，被調査者には男女大学生，働く婦人およびその配偶者が含まれていた。これに対して本研究では，「学生としての自己」という概念について女子短大生に評定が求められている。このように概念や被調査者の性質の差異にもかかわらず，ほぼ一致した因子構造が見い出されたことは，成人における対人認知構造の一般性を示唆している。また従来の対人認知研究で得られてきた因子構造とも，因子数や因子の意味において若干の差異はあるものの，かなりの共通性を有している。性役割研究でこれまでなされてきた，単純な masculinity－femininity という捉え方が不十分であることが，本研究でも示唆されたといえよう。

他方，本研究と先の研究との間にはいくつかの相違点もみられたが，その1つは各因子によって説明される分散の割合の違いであった。すなわち「力強さ」と「親しみやすさ」の因子で説明される分散の割合は，本研究よりも先の研究で多く，「社交性」と「細やかさ」についてのそれは，逆に本研究で多かった。これは，用いられた概念や被調査者の違いに原因があると考えられる。すなわち，先の研究では，職業人という概念が用いられ，また被調査者の多くは働く婦人，その配偶者および男子大学生であった。したがって，職業上の達成や masculinity に深い係わりのある，道具的な「力強さ」の因子，および humanity に関連した「親しみやすさ」の因子が優勢になったと思われる。これに対して本研究では，女子短大生を被調査者として，学生としての自己について評定を求めているので，feminine な活動性や魅力性を表わす「社交性」の因子や，同じく feminine な評価の次元と考えられる「細やかさ」の因子が相対的に優勢になったのであろう。

Ⅳ　結果2――性役割の自己概念と適応および職業意識との関連性

伝統的な社会においては，男らしさ（masculinity）と女らしさ（femininity）の内容は明確であり，しかも攻撃的―非攻撃的，独立的―依存的といったように，両者の性質は相互に排他的なものとして把えられてきた。そしてこのような性役割のステレオタイプが明確な社会では，ステレオタイプの期待にあった者は社会的に認められ，それに反する者には低い評価が与えられた。したがって伝統的な社会では，masculine な男性および feminine な女性が良い適応を示していたと考えられる。

性役割研究においてもこれまでは，masculinity と femininity とを相互に排他的なものとみなし，男性特性と女性特性とを対にした両極尺度によってこれを測定してきた。しかし1970年代に入って新しい性役割観に立った研究がみられてきている。Bem（1974）は，mas-

culinity と femininity とが相互に独立の2次元を構成しているという立場に立ち，それぞれを20項目の単極尺度で測定する性役割インベントリーを作成している。また，masculine でもあり，feminine でもあるタイプとして"androgyny" という概念を新たに導入し，個人を，Masculinity 得点（M得点）の高いタイプ，Femininity 得点（F得点）の高いタイプ，および両者の差の小さいandrogyny の3タイプに分類している。ここで彼女は，個人ごとにM得点とF得点との差のt値を算出し，この値が±1という基準でandrogyny を定義している。したがって，ここにはM得点もF得点も共に高い者だけでなく，両者が共に低い者も含まれているという問題点がある。そして，これらのタイプと適応との関係について，彼女は"硬い性役割分化がすでにその有用性を失った社会においては，androgyny が心理的健康のより人間的な標準となるだろう" と述べている。

Bemのこの主張はSpence，et al.（1975）によって支持されている。彼らはBemの尺度ではなく彼ら自身の作成した尺度によって性役割の自己概念を測定し，またタイプ分けの方法もBemのそれではなく，M得点およびF得点のそれぞれの中央値で高低に分け，それらの組み合わせによって両者が共に低いタイプ（未分化型*），M得点が高くF得点の低いタイプ（M型），F得点が高くM得点の低いタイプ（F型），そして両者が共に高いタイプ（androgyny）の4つに分けている。そして各タイプの self-esteem を比較したところ，被験者の性にかかわらず，androgyny でもっとも self-esteem が高く，以下M型，F型，未分化型の順となった。しかしBemの定義に従ってタイプ分けをした場合には，M型の self-esteem がもっとも高く，androgyny がこれに次ぎ，F型がもっとも低いという結果が得られた。したがってここではBemの主張するandrogyny と適応との関係については支持されたが，彼女のandrogynyの算出方法には前述のような問題点があることが示された。

しかしながらその後androgyny と適応との関連性について疑問が出され，androgyny よりもむしろmasculinity の方が適応と高い関連性をもっている，あるいはタイプによる適応の差はないことを示す研究がいくつかみられてきている。例えばJones，et al.（1978）は，androgyny は行動の柔軟性が高く従って適応も良いだろうという仮説を検討したが，被験者の性にかかわらず，柔軟性も適応も共にandrogynyよりむしろmasculinity と関連しているという結果を得ている。また，Spence，et al.（1979）も，masculinity が self-esteemと高い正の相関を，神経症とは負の相関をもつのに対し，femininity とこれらとの相関はみられないという結果を示している。さらにLubinski，et al.（1981）では，Bem の性役割インベントリーの短縮版と幸福感，ストレスに対する反応，および精神異常（被害者意識）との関連性が重回帰分析によって検討された。しかし彼らは，心理的健康に関しては，Bem の考えも伝統的な性役割観にもとづく仮説（masculine な男性およびfeminine な女性の適性が良い）も共に支持されないという結論を得た。

このように，androgyny がもっとも望ましいタイプなのか，masculinity が適応と関連が深いのか，あるいはタイプによる適応の差はないのかという点に関して，これまでの研究の知見は一致していない。この原因としては，性役割の自己概念を測定する尺度の差異や，どの側面での適応を扱うかの違いが考えられる。

本研究では，独自の性役割尺度を用い，女子短大生の大学生活への適応および職業意識に焦点をあてて，M—Fのタイプとこれらとの関連性を検討することを目的とする。大学生活への適応に関しては，大学生活への満足度，大学への好感度，大学の雰囲気にとけ込んでいる程度といった心理的側面での適応と，学生生活における諸活動にエネルギーを注いでいる程度といった行動的側面での適応とを扱う。また職業意識については，職業生活を通じて実現され得る事柄の中で何を重要視するかという点と，仕事を継続する意志の2点を扱う。さらに self-esteem に関連して自己の諸能力の評価，および女性の社会的役割に対する態度についても，M—Fのタイプとの関係をみることにする。

1　M特性，F特性，N特性の選定

被調査者をタイプ分けするためのM得点とF得点とを算出する基盤となる，M特性とF特性とをまず選ばなければならない。また伊藤（1978）では，性役割因子として masculinity，femininity の他に humanity を見い出しており，われわれの先の研究（若林，他，1981）でも，親しみやすさと名付けられた両性に共通の次元が得られた。そこで両性に共通のN特性を同時に選んだ。

各特性の選定の基準は次のようなものであった。①若林ら（1981）において，男女大学生によって男性によくみられる傾向，女性によくみられる傾向，どちらともいえないとして支持された割合が50％以上であること。②社会的望ましさにおいて＋の方向にあると考えられること。社会的望ましさの高い特性だけを選んだ場合には，社会的望ましさの評定バイアスが大きくなる恐れがあるが，M尺度，F尺度，およびN尺度の等質性を保つこと

---

*　Heilbrun（1981）の命名による。

が必要であると考えた。③M特性，F特性，N特性が相互にできるだけ無相関であること。これは masculinity，femininity，および humanity が独立した3次元であると考える立場から必要である。なかでもM得点とF得点によって4つのタイプを選び出すため，M特性とF特性との間の独立性を優先させた。

以上の基準に従って最終的にM特性9個，F特性10個，N特性7個が選ばれた。これらの特性名と特性間の積率相関係数は，表8に示す通りである。特性間の相関係数の範囲は，M特性とF特性の間では −.29〜.34，M特性とN特性の間では −.08〜.46，F特性とN特性の間では −.25〜.47となっており，有意な相関もいくつかみられるが，全般的にはある程度の独立性が保たれているといえよう。従来 masculinity と femininity は対比的に捉えられてきたが，ここで用いられている特性をみる限り，線の細いがM特性と負の相関を示している他は，M特性とF特性の間の相関は正となっている。これは社会的望ましさの影響によるものかも知れないが，masculinity と femininity とが少くとも対立する概念ではないことを示唆している。またM特性とN特性との間の相関の方が，F特性とN特性間のそれよりも高い傾向がみられる。

表9は，選ばれた特性がどの因子尺度に属するかをみたものである。これをみると，M特性はすべて力強さの因子に含まれ，逆にF特性とN特性でこれに含まれるものは皆無となっており，力強さが男性因子であることが明らかである。これと対照的に，細やかさの因子にはF特性だけが属していることから，これは女性因子といえよう。F特性はその他社交性と親しみやすさの因子に属している。N特性については，社交性と親しみやすさとに分散している。

2　MF型，M型，F型，mf型のサンプルの選定

4つの型に該当するサンプルの選定は，各被調査者のM尺度での平均得点（M得点）とF尺度でのそれ（F得点）とにもとづいてなされた。前述のように，Bem (1974)

表8　M特性，F特性，N特性の相互相関（N＝378）

		M特性								
		たくましい	頼もしい	指導力のある	決断力のある	視野の広い	野心のある	強い	意志強固な	自主的
F特性	おしゃべりな	.16	.24	.29	.25	.13	.15	.23	.12	.21
	細やかな	−.03	.13	.06	.11	.12	.01	−.05	.07	.09
	家庭的	.12	.22	.16	.12	.11	.01	.08	.08	.07
	気持のこまかい	−.01	.10	.04	.11	.11	−.04	−.06	.11	.12
	おしゃれな	.01	.15	.27	.27	.16	.04	.17	.02	.20
	繊細な	.00	.13	.07	.11	.07	.10	.00	.10	.14
	優雅な	.17	.29	.25	.30	.03	.15	.23	.14	.29
	線の細い	−.29	−.14	−.18	−.07	−.04	−.15	−.22	−.01	−.09
	派手な	.10	.19	.22	.20	.15	.12	.13	−.02	.18
	魅力のある	.13	.30	.34	.32	.32	.14	.29	.11	.30

		N特性						
		頭のよい	親切な	誠実な	活発な	社交的	まじめな	明るい
F特性	おしゃべりな	.06	.11	.06	.47	.42	−.23	.46
	細やかな	.15	.33	.22	−.01	.07	.18	.09
	家庭的	.07	.34	.34	.06	.06	.29	.25
	気持のこまかい	.16	.36	.30	−.02	.10	.19	.11
	おしゃれな	.23	.15	.09	.31	.35	−.07	.38
	繊細な	.21	.31	.28	.00	−.00	.16	.03
	優雅な	.30	.27	.18	.15	.26	.12	.25
	線の細い	−.01	.04	.06	−.08	−.04	.06	−.08
	派手な	.13	.10	−.01	.31	.35	−.25	.35
	魅力のある	.37	.26	.13	.23	.36	−.00	.32

		N特性						
		頭のよい	親切な	誠実な	活発な	社交的	まじめな	明るい
M特性	たくましい	.15	.06	.14	.24	.17	.10	.20
	頼もしい	.28	.23	.31	.37	−.08	.06	.31
	指導力のある	.38	.19	.19	.46	.32	.02	.38
	決断力のある	.36	.19	.22	.36	.31	.02	.27
	視野の広い	.25	.16	.11	.21	.28	.04	.25
	野心のある	.09	.02	.08	.22	.15	.01	.09
	強い	.18	.10	.13	.33	.22	.09	.26
	意志強固な	.20	.11	.21	.16	.09	.09	.08
	自主的	.29	.18	.12	.44	.41	.05	.34

表9　各特性の因子への分布

特性＼因子	社交性	力強さ	親しみやすさ	細やかさ	その他
M特性		たくましい 頼もしい 指導力のある 決断力のある 視野の広い 野心のある 強い 意志強固な 自主的			
F特性	おしゃべりな おしゃれな 派手な		家庭的	細やかな 気持の細かい 繊細な 優雅な	線の細い 魅力のある
N特性	活発な 社交的 明るい		親切な 誠実な		頭のよい まじめな

のタイプ分けでは，M得点もF得点も共に高い者と両者が共に低い者とが区別できない。また，Heilbrun (1981) は，androgyny 得点の算出方法として〔（M得点＋F得点）－｜M得点－F得点｜〕を考えているが，これではM型，F型，mf 型を選ぶことができない。そこでここではより明確な方法として全サンプルのM得点およびF得点の平均値から±½σ以上のズレがあるという基準

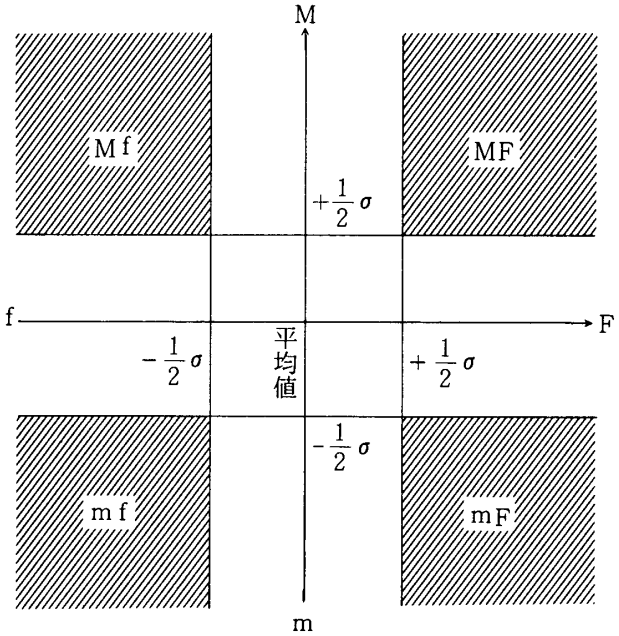

図1　各タイプの選定基準

表10　各タイプのM得点とF得点の平均値　（ ）内はSD

M-F得点＼タイプ N	MF型 (49)	Mf型 (29)	mF型 (26)	mf型 (65)	F値
M得点	4.76 (0.51)	4.69 (0.50)	3.12 (0.39)	3.05 (0.49)	168.71**
F得点	4.91 (0.36)	3.63 (0.22)	4.80 (0.28)	3.41 (0.44)	209.63**

** $p < .01$

により，図1に示す部分に該当するサンプルを選んだ。サンプル数は表10に示す通りである。

表10は，各タイプのM得点とF得点の平均値と分散分析の結果である。当然のことであるが，M得点はMF型とMf型で高く，他の2型はこれらより有意に低い。逆にF得点はMF型とmF型で，他の2型より有意に高くなっている。選ばれたサンプルが妥当なものであったといえよう。

3　性役割タイプと自己評価との関連性

Masculinity と femininity の2次元から4つの性役割型のタイプ分けを行なったが，これらのタイプが，女子学生の自己能力評価とどのような関係をもつのであろうか。MF型で適応が良く，mf 型でそれが悪いとすれば，MF型の自己評価が4タイプ中もっとも高く，mf 型のそれがもっとも低いと予想されるが，果たしてそう

表11 タイプ別にみた各種自己評価の平均値 ( )内はSD

尺度	N	MF型 (49)	Mf型 (29)	mF型 (26)	mf型 (65)	F値
両極型M－F－N尺度	力強さ	4.82 (0.53)	4.55 (0.59)	3.58 (0.65)	3.44 (0.61)	64.06**
	親しみやすさ	5.17 (0.79)	4.35 (0.89)	4.88 (0.77)	4.43 (0.68)	6.63**
	社交性	4.93 (0.59)	4.01 (0.60)	4.54 (0.59)	3.58 (0.67)	47.49**
	細やかさ	3.97 (0.94)	3.38 (0.78)	4.26 (0.93)	3.90 (0.91)	4.67**
	N得点	5.11 (0.41)	4.58 (0.62)	4.50 (0.45)	3.89 (0.60)	49.63**
能力の自己評価	体力	3.76 (0.97)	3.83 (0.89)	3.35 (1.06)	3.40 (0.88)	2.58
	手先の器用さ	3.49 (1.06)	3.07 (1.00)	3.31 (0.88)	2.74 (0.97)	5.80**
	手早く仕事をする	3.65 (0.88)	3.24 (0.79)	2.85 (0.83)	2.52 (0.92)	16.54**
	仕事をコツコツやりとげる	3.45 (0.87)	3.28 (1.03)	3.23 (0.99)	3.19 (0.90)	0.79
	見通し，計画性	3.41 (0.71)	2.97 (0.98)	2.73 (0.78)	2.45 (0.85)	13.07**
	新しい考えを思いつく	3.35 (0.78)	2.93 (0.96)	2.92 (0.98)	2.22 (0.78)	17.58**
	説得力・指導力	3.37 (0.67)	2.93 (0.96)	2.65 (0.75)	2.08 (0.76)	27.36**
	人と上手に接する	3.59 (0.89)	3.17 (0.93)	3.15 (0.88)	2.55 (0.87)	13.22**
	全体	28.06 (2.93)	25.41 (3.61)	24.19 (3.27)	21.14 (4.04)	36.29**

** $p < .01$

であろうか。またこれら4類型は，SD尺度でとらえた自己イメージの諸次元とどのような関連を有しているのであろうか。これらの点について検討しよう。表11は，両極型M－F－N尺度における4因子尺度での平均得点，単極型M－F－N尺度におけるN特性についての平均評定値（N得点），そして種々の能力についての自己評価に関して，4タイプ間の比較をしたものである。

まずM－F－N尺度のいずれの因子尺度においても，タイプによる効果が有意となっている。力強さでは，MF型とMf型が他の2つよりも高い得点を得ている。力強さがmasculinity の代表的側面であることから，この結果はうなずけよう。次に親しみやすさでは，MF型が最も高い得点を取り，mF型がこれに次ぎ，mf 型とMf型では最低となっている。この因子がhumanityという社会的に望ましい側面を示していることから，MF型の自己評価の高さが示唆される。社交性の因子では，MF型とmF型で得点が高く，Mf型がこれに続き，mf型で最低である。ここでいう社交性が，femininity の活動性次元を表わしていることから，十分うなずける結果である。最後に細やかさについては，Mf型で他の3型より低い得点となっている。差は有意でないがmF型で最高である。この結果も，細やかさがfemininity の因子であることを考えると十分納得できよう。これらの結果をまとめると，全般的にMF型でパーソナリティの自

己評価が高く，mf型で低いこと，masculinity を示す力強さではMf型の，femininity を表わす細やかさと社交性ではmF型の自己評価も高いこと，が見い出された。

次にN得点の結果をみると，MF型で得点が最高であり，次にMf型とmF型が続き，mf型が最も低くなっている。表5に示されているようにN特性は社会的な望ましさがすべて高い。したがってMF型の自己評価が高く，mf型のそれが低いことが，ここから示唆される。

もう少し直接的に自己評価の比較をするために，いくつかの能力に関する自己評価をみてみよう。仕事をコツコツやりとげる能力と体力の2つを除いて，すべての能力について一貫してMF型の自己評価がもっとも高く，mf型のそれが最低となっている。Mf型とmF型は両者の中間にあり，相互の自己評価には有意な差がない。

このように，パーソナリティの側面についても能力の側面についても，MF型の自己評価は一貫してもっとも高く，mf型でもっとも低くなっている。

4　性役割タイプと大学への適応

MF型の self-esteem が高く，mf型のそれが低いという結果からは，前者で適応が良く，後者では悪いということが予想されるが，実際にそうであろうか。ここでは，被調査者が大学生であることから，大学への適応という側面について，4タイプと適応との関連性についてみてみよう。

大学への適応に関連した調査項目としては，友人，授業など6つの事柄について満足度を7点評定させたもの，大学に対する好感度を7点評定させたもの，大学の雰囲気にとけ込んでいる程度を5点評定させたもの，そして学生生活において行なわれている20種の活動について，努力や時間を費している程度を7点評定させたものがある。先の3項目は適応に直接関連したものである。他の1項目については，活動の内容によってはそれにエネルギーを費していることが，適応が良いことと直接結びつかないかもしれない。しかし一般的にみれば，積極的に活動し，エネルギーを費している状態は適応が良く，逆に無気力な状態は適応が悪いと考えることができる。

表12に，各項目についてのタイプごとの平均値と分散分析の結果が示してある。学生生活での諸活動に費しているエネルギーの程度に関しては，因子分析によって抽出された2因子にまとめてある。まず学生生活への満足度に関してみるが，課外活動については，これに所属していない者もいるので，この項目は分析から除外した。友人関係についてmf型が他の3タイプにくらべて満足度が低くなっているが，他の項目ではいずれもタイプの

表12　各タイプの大学生活への適応の平均値

( )内はSD

項目		MF型 (49)	Mf型 (29)	mF型 (26)	mf型 (65)	F値
学生生活への満足度	友人関係	5.10 (1.28)	5.10 (1.01)	5.12 (1.21)	4.49 (1.28)	3.34*
	学業成績	3.51 (1.19)	3.21 (1.47)	2.92 (1.23)	3.17 (1.27)	1.33
	授業内容	3.29 (0.94)	3.21 (1.21)	3.15 (0.73)	3.29 (1.13)	0.15
	大学の雰囲気	3.10 (1.07)	3.21 (1.24)	3.31 (1.41)	3.05 (1.32)	0.32
	学生生活全体	3.96 (1.08)	3.93 (1.07)	3.62 (1.20)	3.49 (1.30)	1.84
	全体	3.79 (0.70)	3.73 (0.82)	3.62 (0.74)	3.50 (0.80)	1.53
大学への好感度		4.49 (1.06)	4.28 (1.33)	4.46 (1.45)	3.86 (1.26)	2.88*
大学へのとけ込み具合		3.27 (0.61)	2.93 (0.88)	2.96 (0.87)	2.66 (0.71)	6.18**
役割行動	対人関係	4.77 (1.04)	4.56 (0.81)	4.30 (0.77)	3.68 (1.06)	13.11**
	人格陶冶	3.61 (0.71)	3.43 (0.84)	3.06 (0.87)	3.16 (0.95)	3.64*

*$p<.05$，**$p<.01$

効果が有意ではなかった。当然のことながら，5項目を合わせた得点についても，タイプによる差はみられていない。このように，学生生活への満足度に関しては，MF型でそれが高く，mf型で低いであろうという予想は十分支持されなかった。

しかしながら大学への好感度と大学の雰囲気へのとけ込みにおいては，タイプによる効果がいずれも有意であった。表に示されているように，大学への好感度では，MF型がmf型よりも有意に高い好感をもち，大学の雰囲気へのとけ込み具合では，MF型が他のタイプよりも高い得点を示すという結果が得られた。一方，Mf型とmF型は必ずしもMF型およびmf型と有意に異なってはいない。しかし，MF型とmf型の関係については，予想が支持されたといえる。

最後に諸活動に費しているエネルギーの程度についてみてみよう。ここでも対人関係と人格陶冶の両側面で，タイプの効果が有意となっている。対人関係に関しては，MF型，Mf型，mF型の3者間には差がなく，これらがmf型よりも有意に多くのエネルギーを費しているという結果が得られた。また人格陶冶に対しては，MF型はMf型との差は有意でないが，mF型およびmf型よりも有意に多くのエネルギーを費している。このように，

ここでもMF型が諸活動に積極的に取り組んでいるのに対し，mf型は無気力であるという結果が得られ，予想が支持されたといえよう。

以上述べてきたように，大学生活への満足度については，友人関係満足を除き，4つのタイプによる有意な差がみられなかったが，他の項目についてはいずれにおいても，MF型の得点が高く，mf型のそれは低く，Mf型およびmF型の得点は両者の間にあるという関係がみられた。MF型の適応が良く，mf型のそれは悪いという予想は支持されたといってよいだろう。特に，mf型の，学生生活における対人関係上の問題点や，その結果としての大学への消極的な係わり方は注目に値する結果といえよう。

5　性役割タイプと女性の社会的役割態度

われわれの先の研究（若林，他，1981）では，女子大学生の職業人としての自己イメージの「力強さ」は，女性の社会的役割に関して男女平等主義的態度と正の相関を示し，「細やかさ」は伝統主義的な役割態度と正の相関を有していた。表9に示したように，本研究で用いているM特性はすべて「力強さ」の因子に属し，またF特性は「細やかさ」の因子に多く含まれている。したがってM得点が高く，F得点の低いMf型がもっとも男女平等主義的な役割態度をもち，これとは逆のmF型の役割態度はもっとも伝統主義的であろうという予想ができる。

表13は，女性の社会的役割態度の3つの因子尺度ごとに，各タイプの平均得点と分散分析の結果とを示したものである。分散分析によるタイプの効果は「社会参加の平等性」の因子においてのみ，有意であった。ここでは，Mf型とmF型とが両極にあり，Mf型で平等主義的態度が強く，mF型で相対的に弱くなっている。MF型とmf型はこれらの中間に位置している。他の2因子ではタイプの効果は有意でなかったものの，タイプ間の得点の関係は社会・平等における結果と斉合したものとなっている。すなわち，「家庭を守る伝統主義」の因子では，

表13　各タイプの女性の社会的役割態度の平均値

( )内はSD

因子＼タイプ（N）	MF型 (49)	Mf型 (29)	mF型 (26)	mf型 (65)	F値
社会・平等	5.50 (0.69)	5.79 (0.60)	5.28 (0.57)	5.57 (0.60)	3.18*
家庭・伝統	4.98 (0.96)	4.77 (1.13)	5.12 (0.83)	4.88 (0.74)	0.82
家庭・平等	4.59 (1.35)	5.20 (1.14)	4.55 (1.44)	4.77 (1.11)	1.76

* $p < .05$

mF型の得点がもっとも高く，Mf型で最低となっている。他方，「家庭内分業の平等性」の因子では，Mf型が最高点を，mF型が最低点をとっている。

以上のように，タイプ間の差は必ずしも明確ではないが，3因子を通じて一貫した結果が得られた。すなわち，全般的にはどのタイプも平等主義的であると同時に，伝統主義的な役割態度ももっているが，タイプ間の相対的な関係をみると，Mf型がもっとも平等主義的であり，mF型がもっとも伝統主義的であるという結果が得られた。したがって予想が支持されたといえよう。

6　性役割タイプと職業意識

最後に，将来の仕事に対してもっている意識や構えがタイプによってどのように異なるかについてみてみる。ここでは仕事に対する意識や構えを次の2点によって捉える。1つは，学生の職業志向であり，職業生活を通じて実現しうるいくつかの事柄のうち，何を重要視し，何を重要視していないかという問題である。他の1つは，仕事を継続していく意志に関するものである。女性にとっては結婚や出産が働き続けるか否かを決定する大きな要因となっているが，これらを契機に仕事をやめる意志をもっているのか，あるいは仕事を続けていく意志をもっているのかという点についてみてみる。

まず始めに，職業生活を通じて実現しようとしている重要な事柄についてみてみよう。10項目の中から選択させる形式で回答を求めているが，ここでは4つのカテゴリーにまとめた。カテゴリー名とそれに含まれる内容は次の通りである。①人間的成長。人間的成長をはかること。②職業上の成功。自分の実力が認められること，仕事に誇りをもつこと，独創性やアイデアを発揮すること，出世や昇進で同僚より抜きんでること。③私生活の充実。高い給与を得ること，趣味やレジャーなどの私生活を充実させること。④職場の環境。職場での良好な人間関係を得ること，快適な職務環境を得ること。

表14は，各タイプの選択の分布をみたものである。タイプによる分布の違いは有意ではなかった。しかし結果は予想に一致した方向のものである。すなわち，重要事項については，Mf型とmF型との差異が大きく，Mf型では職業上での成功を重要視している割合が40パーセント余りで人間的成長と並んで多いのに対し，mF型でこれを重要視している割合は¼強しかない。これと逆に私生活の充実および職場の環境を重要視している者は，Mf型では20パーセントに満たないのに対し，mF型では40パーセント弱と多くなっている。以上のようなタイプごとの違いに対するχ^2検定の結果は，統計的に有意な差をもたらさなかった。しかし，Mf型が相対的に仕

表14　タイプ別の職業生活での最重要事項の内訳　( )内は%

カテゴリー／タイプ	人間的成長	職業上の成功	私生活の充実	職場の環境	無答
MF	21 (42.9)	16 (32.7)	4 (8.2)	8 (16.3)	0 (0.0)
Mf	12 (41.4)	12 (41.4)	1 (3.4)	4 (13.8)	0 (0.0)
mF	9 (34.6)	7 (26.9)	3 (11.5)	7 (26.9)	0 (0.0)
mf	32 (49.2)	20 (30.8)	6 (9.2)	7 (10.8)	0 (0.0)

$\chi^2 = 6.45$, $df = 9$

事を通じての成長や仕事での達成を重要視するという積極的な意識をもっているという傾向がうかがえる，ということはいえるだろう。なお，将来の職業生活において重要ではないとされる項目についても同様な分析が試みられたが，重要項目ほど明確な結果は得られなかった。

仕事の継続意志に関する結果は，表15に示す通りである。ここでは継続意志を4カテゴリーに分け，各タイプの回答の分布を示した。χ^2 検定の結果は有意であった。mF型とMF型では結婚したらやめたい，あるいは子どもができたらやめたいと考えている者が多く，ずっと働き続けたいと思っている者は特にmF型でわずかしかいない。これと対照的に，Mf 型ではずっと働き続ける意志をもっている者が半数おり，結婚や出産でやめたいと考えている者はわずかにすぎない。mf 型では，子どもが小さいうちは育児に専念し，子どもの手が離れたら再就職したいと考えている者が，他のタイプにくらべて多くなっている。

Mf 型は，他のタイプにくらべれば，職業上の達成を重要視する割合は高い傾向があった。そしてまたずっと働き続ける意志をもっている者も多いことが判明した。これと対照的なのがmF型で，職業上の成功よりも私生活の充実や職場環境が重要視され，結婚や出産を契機にやめたいと考えている者が半数近くみられた。このように，タイプ間の比較では，Mf 型の仕事への構えがもっとも積極的であり，mF型のそれがもっとも消極的であるということができよう。

表15　タイプ別の仕事の継続意志の内訳　( )内は%

カテゴリー／タイプ	結婚したらやめたい	子どもができたらやめたい	子どもの手がはなれたら再就職	ずっと働き続けたい
MF	11 (22.4)	8 (16.3)	20 (40.8)	10 (20.4)
Mf	1 (3.4)	3 (10.3)	10 (34.5)	15 (51.7)
mF	8 (30.8)	4 (15.4)	12 (46.2)	2 (7.7)
mf	9 (13.8)	9 (13.8)	35 (53.8)	12 (18.5)

$\chi^2 = 23.43$, $df = 9$, $p < .01$

7　討　論

自己評価および大学への適応に関しては，一貫してMF型でこれらが高く，mf 型で最低であるという結果が得られた。したがってBem (1974) の主張するandrogynyの心理的健康の高さに関する仮説が支持されたといえよう。しかしMF型とmf型とがこのように対照的な結果を示していることは，両者を区別できない彼女のandrogyny の算出方法が不適当なものであることを同時に明らかにしている。性役割タイプの類型化に関しては，やはりSpence, et al. (1975) や Baucom (1976) の主張する4タイプ化がより妥当であるといえよう。

自己評価と性役割タイプとの間にはとくに強い明瞭な関係がみられた。しかしここで取り上げられた能力は職業生活に関わりの深いものに限られているので，androgyny の self-esteem が高いと結論するためには，さらに検討を加える必要があるだろう。また本研究では，社会的望ましさによる評定バイアスのチェックがなされていない。ここで用いられたM特性，F特性，N特性はいずれも社会的に望ましいと考えられるものであり，能力についても性役割タイプとの有意な関係のみられたものはいずれも社会的望ましさの高い能力である。したがって，性役割タイプと自己評価との関連性にはこのようなバイアスが含まれている恐れがあり，この点についても今後検討する必要がある。

大学への適応と性役割タイプとの関係は，これにくらべて弱いものであった。中でも大学生活における満足度に関しては，対人関係を除いて性役割タイプによる有意な差がみられなかった。これは，とくに学業成績や授業内容については，学業に対して積極的な構えをもち，要求水準が高い場合には不満が多いように，満足度が高いことが必ずしも好ましい状態とはいえないということに原因があるのかもしれない。

このように自己評価および適応に関してはMF型とmf型とが対照的な関係にあったのに対して，社会的役割態度と職業意識についてはMf 型とmF型とが対照をなしていた。すなわち，Mf 型は男女平等主義的な性役割態度をもち，将来の仕事に対して達成指向的な積極的な構えを有しているが，mF型は相対的にみれば伝統主義的

な性役割態度をもち，仕事に対する構えも消極的であるという結果が得られた。M特性が達成に関連したものを多く含んでいることから，これはうなずける結果であろう。性役割タイプと社会的役割態度との結果からは，平等主義的な態度は masculinity と伝統主義的態度は femininity と正の関連性があるという予想が導かれるが，表7に示されているように，M，F，Nの各得点と社会的役割態度の3因子との間の相関は高いものではなかった。これは平等主義的役割態度得点の分布が高い方に偏っていたためと思われる。すなわち，現在の社会では特に女性役割について伝統的な性役割観が否定され，平等主義的なステレオタイプがあるため，自己概念のあり方にかかわらずこのようなステレオタイプに一致する方向に回答をしたのであろう。先の研究（若林，他，1981）においても，自己イメージと社会的役割態度との関連性はあまり高くなかった。Mf型とmF型のように極端なサンプルを選んだ場合には，ある程度の関連性がみられたのであろう。

このように女性の役割態度や職業意識に関しては，androgyny よりもむしろ masculinity が強い関係を有しているという結果を考えると，職場適応に関しては果してMF型とMf型のいずれで適応が良いのか疑問が生じる。本研究では女子短大生が被調査者であり，しかもこれらの短大はすべて女子校であった。したがって大学への適応に対してはM得点だけでなくF得点も効果をもっていたと考えられる。これに対して職場適応においては，職場で特に要求される特性を多く含んだmasculinity が強い関係をもっているという予想も可能である。先の研究において自己イメージと職場適応との関係をみたところ，「力強さ」と「親しみやすさ」が適応と強い関連性をもち，「社交性」と「細やかさ」の適応との関係はあまり強くなかった。ここからもMF型よりむしろMf型の職場適応の良さが示唆される。この点については今後，職業人を対象にして検討する必要があろう。

本研究は，女性のキャリア発達に関する一連の研究の一部をなすため，女子短大生だけが対象とされた。しかし Heilbrun（1981）が述べているように，女性が男性的な特性や行動を示すことは比較的自由であるのに対し，男性はステレオタイプによる期待の制約をより強く受け，それから逸脱することが問題視されるとすれば，男性にとって androgyny を発達させることはより困難であり，また適応との関係についても女性とは異なった様相を示すかもしれない。したがって，今後，男性を対象とした検討を進めていくことも必要であろう。

V　結果3――短大生の自己能力評価と社会的・職業的役割意識

1　目　的

これまで検討されてきた，自己イメージと社会的・職業的役割意識との関連を，短大生の職業社会化という観点からとらえなおすことが，結果3の目的である。

職業社会化とは，高橋（1980）によれば，職業につく上で必要な知識・技能・態度などを習得していき，それぞれの役割を遂行するために制度化された行動様式や価値を内面化していく過程であり，職業上のアイデンティティを形成していく過程である。しかもこの過程は，就職した時点ではじまるのではなく，子どもの頃から徐々に準備されていく。とくに，今日のように多数の青年が高校を経て高等教育機関で学ぶようになると，大学や短大は職業を準備する場として，つまりいわゆる職業への社会化の場として重要な役割を担うことになる。大学あるいは短大卒業後，彼らがつく職業の中でも，専門職あるいは準専門職とみなされているもの，たとえば女子に関していえば，教師，看護婦，保母などの職種についての準備教育の場として，大学は重要な役割を果していると思われる。

したがってわれわれが，職業社会化の過程という観点から自己イメージと社会的・職業的役割意識との関連を検討していく際には，2つの視点が必要になる。まず第1に，青年自身が自己イメージや社会的・職業的役割意識をどのように明確化していくか，最終的にそれらをどのようにして職業アイデンティティに統合していくかという点を明らかにしなければならない。第2には，学生が所属する短大・大学あるいは学科などが，教育プログラムの中でどの程度職業準備教育を志向しているかということと関連づけた分析をしなければならない。

若林ら（1981）は，女性の職業自己イメージの形成と発達という問題を性役割認知および性役割態度と関連づけて論じた。そして，職業自己イメージ尺度を作成，分析した結果，職業婦人の場合に，仕事のやりがいを中心とした職場適応の水準と力強さの自己イメージとが密接な関係にあることが明らかにされた。

従来の性役割に関する研究を概観すると（Kelly and Worell，1977），masculinity と femininity を2つの次元としてとらえ，前者をParsons and Bales (1955) のいう認知的道具性や目標志向性と対応させ，後者を表出的，支持的，情緒的反応と対応させている場合が多くみられる。一方，Heilbrun（1981）によれば，性役割次元のうち masculinity は能力の高さを暗示するという。さらに，職業アイデンティティを形成する上で，主

観的な能力評価が重要であるという指摘をする研究者もある。こうした点を考えると，職業に必要な能力の評価が，性役割について考える上で重要な次元になることが理解できる。そこで，本研究では，職業に必要な基本的能力についての自己評価の水準が社会的・職業的役割意識とどのように関連しているのかを明らかにすることを第1の目的とする。

ところで，職業アイデンティティを形成する上で，大学・短大などの高等教育機関はどのような役割を果しているのだろうか。Astin（1977）は，大学進学が学生の個人的・社会的・職業的発達にどのような影響を及ぼすかという問題について，大規模な調査研究を行なっている。そのなかでもとくに，学生同士の相互作用の影響や大学のタイプによる成果のちがいに注目した報告を行なっており，大学の種別間比較が重要な知見をもたらすことを示している。わが国においても，看護科の学生が看護職に適応していく過程を分析した研究（内田ほか，1978）や保育科学生の職業意識を調べた研究（宮川，1979）などがある。これらの研究を通じて，大学での教育内容が，職業社会化を考える上で重要な役割をもっていることを知るのである。

われわれは，これらの研究を参考にして，短大の学生が所属する学科で，どの程度職業的専門教育が行なわれているのかという観点から所属学科を分類し，所属学生の行動や意識のちがいを検討しようとする。そのために，短大のなかで，とくに専門的職業教育を行なっていない人文系学科に所属する学生を非専門群とし，専門的職業教育を行なっている看護系・保育系学科に所属する学生を専門群とし，この2群の学生の社会的・職業的役割意識にどのようなちがいがみられるかを検討することになる。これが本研究の第2の目的である。

具体的には，本研究では，学生の自己能力評価水準（高い・低い）と所属学科（専門・非専門）によって分けられた4群の学生の間で，(ⅰ)短大入学に際して考慮した要因などにどのようなちがいがみられるか，(ⅱ)学生生活についての印象や，大学生活の中での行動などにどのようなちがいがみられるか，(ⅲ)将来の職業生活についての考え方や，将来の職業生活と大学生活との関連のつけ方にどのようなちがいがあるか，などについて検討を加えることになる。

2　分析に用いた資料

本研究で得られた資料は，被調査者の所属する短大の学科によって非専門群と専門群の2群に分けられた。一方，職業に必要な基本的能力についての自己評価水準によって被調査者を分けるために，表11に示した8項目について評定された自己能力評価の総得点を求めた。被調査者全体の平均値は24.54，標準偏差は3.86であった。そこで総得点が25.00以下の者を能力評価の低いグループ，25.00以上の者を能力評価の高いグループとして，上記2群の内訳を調べた。その結果，非専門群では低いグループ88名，高いグループ86名であり，専門群ではそれぞれ96名，108名となった。この結果にもとづいて，各群各グループの人数が86名ずつになるように，余剰サンプルをランダムに抽出して除外し，分散分析のための各セルの均衡をはかった。

3　結　果

（1）　所属学科および自己能力評価によって分割されたサンプルの特徴について

まず最初に，所属学科と自己能力評価水準によって分けられた4つのグループの特徴を，短大入学に関連した要因の分析結果にもとづいてみておくことにする。

表16には，所属別にみた志望順位の内訳を示した。表から明らかなように，非専門群では第1志望と第2志望以下の間には差がないが，専門群では第1志望の者がはるかに多いことがわかる。

われわれは，現在の短大に入学する際に考慮した要因は何かということを明らかにする目的で，あらかじめ決められた12項目について，「大いに考えにいれた」から「まったく考えにいれなかった」まで5点法で評定を求めた。そして考慮に入れた程度にしたがって，5～1点を与えた。そのようにして得られた各群の平均値と標準偏差を示したのが表17である。また，所属（非専門，専門）と能力評価水準（低い，高い）を要因とした2要因分散分析の結果を，表17の右欄にあわせて示した。

まず，各要因が入学に際して考慮された程度について全般的傾向をみておくことにしよう。よく考慮された要因は「学業成績」「自分の興味・関心」「自分のなりたい

表16　所属別にみた志望順位の内訳（　）内は％

所属＼志望順位	第1志望	第2志望以下	計
非専門	85 (49.4)	87 (50.6)	172 (100.0)
専門	105 (61.0)	67 (39.0)	172 (100.0)
計	190 (55.2)	154 (44.8)	344 (100.0)

$\chi^2 = 4.24$，　$df = 1$，　$p < .05$

表17 所属および自己能力評価別にみた入学考慮要因の平均値・標準偏差と分散分析の結果

入学考慮要因 ＼ 所属 / 能力評価 / N	非専門 低い (86)	非専門 高い (86)	専門 低い (86)	専門 高い (86)	主効果 所属	主効果 能力	交互作用
学業成績	4.37 (0.87)	4.22 (1.12)	3.88 (1.13)	4.04 (0.95)	**	—	—
模試の成績	3.35 (1.45)	3.37 (1.51)	2.93 (1.36)	3.26 (1.12)	—	—	—
自分の興味・関心	4.09 (1.03)	4.07 (1.03)	4.00 (1.04)	3.88 (1.17)	—	—	—
親の職業	1.38 (0.87)	1.86 (1.18)	1.44 (0.81)	1.54 (0.89)	—	**	—
家庭の経済力	2.87 (1.27)	3.04 (1.55)	2.70 (1.45)	2.90 (1.52)	—	—	—
この大学の評判	4.11 (0.83)	4.13 (1.02)	3.22 (1.29)	3.48 (1.09)	**	—	—
自分のなりたい職業	3.26 (1.28)	3.19 (1.32)	4.63 (0.78)	4.79 (0.41)	**	—	—
通学距離	3.08 (1.28)	3.00 (1.39)	3.61 (1.27)	3.93 (1.12)	**	—	—
家族の意見	3.81 (1.15)	3.84 (1.12)	3.29 (1.35)	3.36 (1.48)	**	—	—
先生の意見	3.50 (1.33)	3.57 (1.29)	3.28 (1.37)	3.29 (1.35)	—	—	—
友だちの意見	2.49 (1.25)	2.76 (1.31)	2.88 (1.28)	3.26 (1.20)	**	*	—
共通一次試験がないこと	2.81 (1.66)	2.40 (1.57)	2.36 (1.44)	2.23 (1.16)	*	—	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

職業」などである。一方，考慮されなかった要因としては「親の職業」「共通一次試験がないこと」「友だちの意見」がある。同様の傾向は，群別・グループ別結果についても認められた。

つぎに，2要因分散分析の結果にしたがって，各グループの特徴をみていくことにする。表17によれば，「学業成績」「この大学の評判」「自分のなりたい職業」「通学距離」「家族の意見」「友だちの意見」「共通一次試験がないこと」の7項目で所属要因の主効果が認められた。一方，能力評価要因に関して主効果がみられたのは，「親の職業」「友だちの意見」の2項目だけであった。また，両要因の交互作用はいずれの項目に関しても認められなかった。

これらの結果にもとづいて，下位グループ間の平均値を比較してみよう。表17から明らかなように，非専門群は専門群よりも，「学業成績」「この大学の評判」「家族の意見」「共通一次試験がないこと」の4項目での平均値が大きく，これらの項目を短大入学に際してよく考慮しているといえる。一方，専門群では非専門群よりも「自分のなりたい職業」「通学距離」「友だちの意見」の3項目で平均値が大きく，とくになりたい職業について考慮した程度に著しい差がみられた。能力評価の低い群と高い群とを比べてみると，高い群の方が「親の職業」「友だちの意見」の2項目で低い群よりも平均値が大きいことがわかる。

以上のことから，専門群では自分のなりたい職業と結びついた大学の選択を行なっているのに対して，非専門群では学業成績や大学の評判，家族の意見など主体性の

程度が小さい要因の影響も強いといえる。

短大・大学における職業への社会化ということを考えると，入学に関してみられる専門群と非専門群とのちがいが，学生生活や社会的・職業的役割意識，あるいは卒業後の職業生活についての見通しなどとどのように関連するかは，重要な問題であると思われる。そこで次に，これらの要因の関連について検討していくことにする。

（2） 自己能力評価と学生生活意識，社会的・職業的役割意識との関連について

本研究で調査された，自己イメージ，学生生活意識，社会的・職業的役割意識についての，さまざまな尺度の平均値が下位グループ間でどのように異なっているかを検討してみよう。

SD法による4つの自己イメージ下位尺度のそれぞれについて，2要因分散分析を行なった結果は表18に示した通りである。所属の主効果がみられたのは，社交性（P＜.01）のみであった。一方，能力の主効果は，力強さ（P＜.01），親しみやすさ（P＜.01），社交性（P＜.01）の3尺度において見出された。なお，交互作用はみられなかった。これらの結果にもとづいて，各

表18 所属および能力評価別にみた各尺度の平均値・標準偏差と分散分析の結果

下位尺度		所属	非専門		専門		主効果		交互
		能力評価	低い	高い	低い	高い	所属	能力	作用
		N	(86)	(86)	(86)	(86)			
自己イメージ	力強さ		3.77 (0.67)	4.39 (0.65)	3.75 (0.60)	4.40 (0.55)	—	**	—
	親しみやすさ		4.51 (0.76)	4.77 (0.87)	4.58 (0.62)	4.96 (0.71)	—	**	—
	社交性		4.10 (0.63)	4.60 (0.71)	3.87 (0.66)	4.37 (0.62)	**	**	—
	細やかさ		3.82 (0.99)	3.85 (1.04)	3.78 (0.83)	3.91 (0.80)	—	—	—
自己能力評価			21.44 (2.69)	27.24 (2.14)	21.54 (2.59)	27.87 (2.36)	—	**	—
学生生活満足度			3.54 (0.82)	3.83 (0.78)	3.66 (0.74)	3.94 (0.75)	—	**	—
大学への好感度			4.20 (1.36)	4.35 (1.25)	4.08 (1.13)	4.42 (0.99)	—	—	—
大学へのとけ込み具合			2.86 (0.71)	3.12 (0.79)	2.88 (0.76)	3.11 (0.72)	—	*	—
行動	対人関係		4.14 (0.97)	4.50 (1.03)	3.89 (1.07)	4.32 (0.91)	*	**	—
	人格陶冶		3.30 (0.87)	3.53 (0.90)	3.07 (0.87)	3.59 (0.73)	—	**	—
社会的役割	社会・平等		5.38 (0.65)	5.49 (0.67)	5.45 (0.60)	5.37 (0.59)	—	—	—
	家庭・伝統		4.83 (0.75)	4.80 (0.97)	4.91 (0.81)	5.08 (0.78)	*	—	—
	家庭・平等		4.80 (1.20)	4.79 (1.21)	4.56 (1.11)	4.64 (1.27)	—	—	—
大学の効用			2.80 (0.92)	2.76 (0.84)	3.51 (1.03)	3.99 (0.80)	**	*	**

*p＜.05，**p＜.01

下位尺度の平均値を比較してみると，非専門群では専門群よりも社交性のある自己イメージを描いていること，また能力評価の高い者は，低い者よりも，力強いそして親しみやすく，社交性のある自己イメージを描いていることがわかる。

学生生活に関する尺度について分散分析の結果をみてみると，所属の主効果が認められたのは，学生生活で力を注いでいる行動のうち，対人関係に関する尺度（P＜.05）のみであった。しかし，能力の主効果は，学生生活満足度（P＜.01），大学へのとけ込み具合（P＜.05），学生生活で力を注いでいる行動の2側面，対人関係と人格陶冶（いずれもP＜.01）の4尺度で認められた。これらの結果にもとづいて各下位グループの平均値を詳しくみてみると，表18の結果から，非専門群の学生は専門群の学生よりも，学生生活においては対人関係に力を注いでいることがわかる。また，自己能力評価の高いグループは低いグループよりも，学生生活に満足しており，大学の雰囲気にもとけ込んでいる，さらに日ごろの学生生活の中では，対人行動にしろ，人格陶冶に関する行動にしろ，積極的に力を注いでいることがわかる。

女性の社会的役割態度の下位尺度については，分散分析による結果をみると，家庭を守る伝統主義の尺度で所属の主効果がみられたにすぎない。この尺度では，非専門群の学生よりも専門群の学生の方が平均値が高く，家庭における役割について伝統的な考え方を支持しているといえる。この点については，のちに検討することになろう。

さいごに，結果2で得た性役割タイプと自己能力評価の関連についてみておく。表19に示したように，能力評価の高いグループでは，性役割タイプとしてはMF型が多く，全体の53.2％を占める。一方，能力評価の低いグループでは，MF型の対極にあるmf型の者が全体の63.6％を占めている。このことから，能力評価の水準が自己イメージと密接な関係にあることがわかる（なお，いずれの型にも属さない被調査者190名は，表から除いてある）。

表19 能力評価別にみた性役割タイプの内訳

（ ）内は％

能力評価＼タイプ	MF	Mf	mF	mf	計
低い	6 (7.8)	11 (14.3)	11 (14.3)	49 (63.6)	77 (100.0)
高い	41 (53.2)	14 (18.2)	11 (14.3)	11 (14.3)	77 (100.0)
計	47 (30.5)	25 (16.2)	22 (14.3)	60 (39.0)	154 (100.0)

$\chi^2 = 50.49$，$df = 3$，$p < .001$

以上の結果をまとめてみよう。まず，所属別にみると，非専門群は専門群よりも社交性のある自己イメージをもち，日ごろの学生生活においても対人関係にかかわる活動に多くの時間を費している。一方，専門群は，社会的役割態度において，家庭を守る伝統主義的傾向が強いことが特徴となっている。

自己能力評価別にみると，能力評価の高いグループは，低いグループに比べて，力強く，親しみやすいそして社交性のある自己イメージをもっている。また，学生生活に満足しており，大学への一体感も強い。さらに，日常の学生生活においても積極的である。そして，性役割のタイプにおいてもMF型が多くみられ，mf型に集中する自己能力評価の低いグループと対照をなしていた。

（3） 将来の職業生活と大学の役割について

ここでは，将来の職業生活に対する考え方を中心にみていくことにする。

まず，就職したとしたら一生仕事を続けるつもりかどうかをたずねた結果についてみてみよう。表20には，所属別にみた結果を示した。全体としては，「手がはなれたら再就職したい」（47.1％）という者が最も多く，ついで「ずっと働き続けたい」（20.9％）という者が多い。しかし，所属別にみると，非専門群では「再就職」（40.1％）についで，「結婚したらやめたい」（26.2％）という者が多く，「子どもができたらやめたい」（16.9％）という者とあわせると，43.1％が一時的には就職するが，いずれは仕事をやめて家庭にはいりたいと考えている。一方，専門群では，「再就職」（54.1％）についで，「ずっと働き続けたい」（25.0％）という者が多く，あわせて79.1％に達している。これらの結果から，専門群では，非専門群とは異なり，可能な限り仕事を続けたいと考えている者が大半であることがわかる。

能力評価別の結果を表21にしたがってみてみよう。自己能力評価の低いグループでは「手がはなれたら再就職したい」（50.0％）という者が最も多いが，ついで多いのは「結婚したらやめたい」（22.7％）という者である。一方，自己能力評価の高いグループでは「再就職」（44.2％）についで，「ずっと働き続けたい」（25.0％）とする者が多い。しかし，両グループのちがいは，先の所属別の結果ほど顕著ではなかった。

つぎに，将来の職業生活を通じて重要な事柄は何か，そしてまた，その事柄を実現する手段として大学は役に立っているかどうかを調べた。その結果が表22，表23，図2である。

表20　所属別にみた仕事の継続意志の内訳　　( )内は%

所属＼継続意志	結婚したらやめたい	子どもができたらやめたい	手がはなれたら，再就職したい	ずっと働き続けたい	計
非専門	45 (26.2)	29 (16.9)	69 (40.1)	29 (16.9)	172 (100.0)
専門	18 (10.5)	18 (10.5)	93 (54.1)	43 (25.0)	172 (100.0)
計	63 (18.3)	47 (13.7)	162 (47.1)	72 (20.9)	344 (100.0)

$\chi^2 = 20.42$，$df = 3$，$p < .001$

表21　能力評価別にみた仕事の継続意志の内訳　　( )内は%

能力評価＼継続意志	結婚したらやめたい	子どもができたらやめたい	手がはなれたら，再就職したい	ずっと働き続けたい	計
低い	39 (22.7)	18 (10.5)	86 (50.0)	29 (16.9)	172 (100.0)
高い	24 (14.0)	29 (16.9)	76 (44.2)	43 (25.0)	172 (100.0)
計	63 (18.3)	47 (13.7)	162 (47.1)	72 (20.9)	344 (100.0)

$\chi^2 = 9.49$，$df = 3$，$p < .05$

表22　所属および能力評価別にみた職業生活での重要事項の内訳

( )内は%

所属	能力＼重要事項	人間的成長	職業上の成功	私生活の充実	職場の環境	計
非専門	低い	38 (44.2)	18 (20.9)	12 (14.0)	18 (20.9)	86 (100.0)
	高い	31 (36.0)	35 (40.7)	5 (5.8)	15 (17.4)	86 (100.0)
専門	低い	39 (45.3)	30 (34.9)	3 (3.5)	14 (16.3)	86 (100.0)
	高い	37 (43.0)	35 (40.7)	5 (5.8)	9 (10.5)	86 (100.0)
計		145 (42.2)	118 (34.4)	25 (7.2)	56 (16.3)	344 (100.0)

表23 職業生活での重要事項別にみた大学の効用についての平均値と標準偏差

重要事項	N	平均	標準偏差
全体	344	3.20	1.13
人間的成長	145	3.32	1.12
職業上の成功	118	3.27	1.21
私生活の充実	25	3.04	1.14
職場の環境	56	2.82	0.92

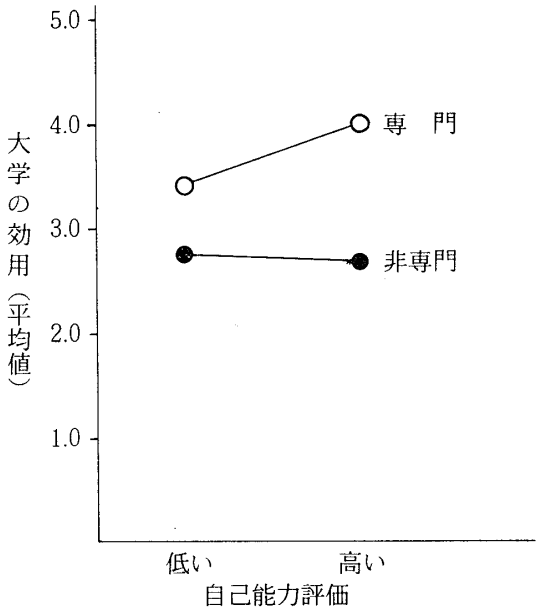

図2 所属および能力評価別にみた大学の効用

表22には，所属および能力評価別にみた重要な事項の内訳を示した。結果の整理にあたっては，結果2で述べたように10項目を4つのカテゴリーにまとめた。全体の傾向をみると，「人間的成長」（42.2％），「職業上の成功」（34.4％）などをあげる者が多いことがわかる。所属別・能力評価別にみても，全体の傾向と大きくかわるわけではないが，非専門群のうち能力評価の低いグループでは，他のグループに比べて「私生活の充実」（14.0％），「職場の環境」（20.9％）をあげる者が多い。

それでは，これらの重要事項を実現するために，大学はどの程度役に立っているのだろうか。表23には，重要事項別にみた大学の効用についての平均評定値と標準偏差を示した。1要因分散分析を行なったところ，5％水準で統計的に有意な差がみられた。表23から明らかなように，「人間的成長」の平均値と「職場の環境」の平均値との間には明らかに差がみられ，「人間的成長」をあげる者の方が大学が役立っていると考えていることがわかる。

大学の効用について，所属および能力評価別に調べた結果をつぎにみてみよう。表18の最下段に示したように，大学の効用について，所属と能力評価の2要因分散分析を行なった結果によると，所属と能力評価の主効果が認められ（それぞれ$P<.01$，$P<.05$），また所属×能力評価の交互作用も認められた（$P<.01$）。この結果にもとづいて，各グループの平均値を図示したものが図2である。図から明らかなように，①非専門群と専門群とを比べると専門群の方が，②能力評価の低いグループと高いグループとを比べると高いグループの方が，それぞれ大学の効用をより高く認めていることがわかる。さらに，この4グループの間の関係をみると，専門群の中でも自己能力評価の高いグループでとくに大学の効用を認める傾向のあることがわかる。

これまでみてきたように，所属や自己能力評価の水準によって価値観や将来の職業に対する考え方にかなりのちがいがあることがわかった。そこで，さいごに，学生が，今後の大学生活についてどのような見通しをもっているのかをみておくことにする。表24には，所属別にみた大学生活についての見通しについての分析結果を示した。学生がいだいた印象を「よい」と「あまりよくない」にまとめてみたところ，非専門群では「よい」という者が32.0％であるのに対し，専門群では54.1％となっており，専門群の方が，明るい見通しをもっている者が多いといえる。

以上の結果から，専門群は非専門群に比べて，できるだけ仕事を継続して行なっていきたいということ，また

表24 所属別にみた大学生活についての見通し

所属＼見通し	あまりよくない	よい	計
非専門	117 (68.0)	55 (32.0)	172 (100.0)
専門	79 (45.9)	93 (54.1)	172 (100.0)
計	196 (57.0)	148 (43.0)	344 (100.0)

(注) 「あまりよくない」は「いつかは転換が必要」と「なんとかうまくいく」の回答をあわせたもの，「よい」は「だいたい進める」と「十分活躍できる」の回答をあわせたものである。

$\chi^2 = 16.23$，$df = 1$，$p<.001$

職業生活で重要なことは人間的成長であり，こうした重要事項を実現するために大学は大いに役立っていると考えていることがわかった。また，同様の傾向は，自己能力評価の高いグループでも認められ，大学が役立っているという評価は，専門群のなかでも能力評価の高いグループで顕著であった。

4　考　察

本研究での分析目的は，職業に必要な基本的能力について，短大生がもっている自己評価の水準と，現在所属している学科の教育プログラムが専門的職業教育を志向している程度とが，彼女らの自己イメージや社会的・職業的役割意識とどのように関連しているかを明らかにすることである。得られた結果をまとめてみると，次のようになる。

①看護・保育系学生からなる専門群は，人文科学系学生からなる非専門群よりも，第1志望で入学した者が多い。大学の選択に際しては，両群の学生とも，学業成績，自分の興味・関心，自分のなりたい職業などを考慮しているが，非専門群では学業成績，この大学の評判，家族の意見，共通一次試験がないことなどを考慮する傾向があるのに対し，専門群では自分のなりたい職業，通学距離，友だちの意見を考慮する傾向がある。

自己能力評価水準にしたがって検討したところでは，評価の高い群が，親の職業，友だちの意見を考慮する傾向がみられる。

②自己イメージ，学生生活意識，社会的・職業的役割意識に関する下位尺度についての結果によれば，非専門群は，専門群に比べて，社交性のある自己イメージを描いており，学生生活でも対人関係に力を注いでいる。一方，専門群は社会的役割態度において，家庭における役割について伝統的な考え方を支持する傾向にある。

自己能力評価の水準との関連でみると，能力評価の高いグループは，低いグループに比べて，力強く，親しみやすい，社交性のある自己イメージをもっている。また学生生活満足度が高く，大学への一体感も強い。さらに，日常の学生生活においても対人関係，人格陶冶の2側面にともに多くの時間を費している。そして，性役割タイプではMF型が多く，mf型が多い能力評価の低いグループとは明らかに異なっている。

③将来の職業生活と関連づけて考えてみると，専門群は非専門群に比べて，できる限り仕事を継続したいと考える者が多い。また，職業生活で重要なことは人間的成長に関わることであり，それを実現する手段として大学が役立っていると考えている。

自己能力評価の高いグループも，専門群と同様の結果を得ており，とくに大学が役立っているかどうかについては，専門群の中でも能力評価の高いグループで一層役立っていると考えている。

これらの結果にもとづいて，以下では次の3点について考察する。①専門群と非専門群にみられる，大学入学に関連した要因のちがいが，学生生活や将来の職業生活への準備とどのようにかかわっていくのか。②自己能力評価と社会的・職業的役割意識の形成とはどのように関連するのか。③いわゆる職業への社会化と大学の役割（効用）との関連はどうか。

大学入学に際してどういう要因を重視したかということは，現に所属している学科およびそこで受けている教育に対してどの程度満足しているかということと密接な関係をもつ。われわれが設定した要因については，専門群も非専門群も，入学に際し同じような項目を重視している。しかし，詳しく比較検討してみると，両群の学生の姿勢のちがいが浮き彫りにされてくる。つまり，非専門群ではどちらかといえば，あまり主体的に選択がなされなかったのである。したがって，相対的に専門群の学生が主体的な選択を行なって入学してきていると考えられる。しかも，とくに専門群で第1志望の者が多いことを考えると，彼らを取りまく環境は大学生活への適応や将来の職業生活にとって，より好ましい効果をもたらすものと思われる。

大学へ進学することによって，青年の人格形成に様々な影響が及ぶであろうし，大学の種別や学部・学科によって影響は異なるであろう。こうしたことは，社会的態度の研究で得られた，大学によって傾向が異なるという結果からも予想できる（後藤ほか，1979）。しかし，この傾向の多様さが，入学時点ですでにある程度はっきりしていることなのか，入学後のさまざまな経験を通して顕著になるのかは，必ずしも明らかではない。今後，入学時点から卒業までの，短大生・大学生の価値観の変容に関する研究が必要であろう。

第2の問題は，職業アイデンティティの形成にかかわる要因と関係している。職業アイデンティティの形成は，Erikson，E．H．のいう自我同一性の確立の一側面であり，自己の能力や特性などについて主観的に下された評価や，それにもとづいて作られた自己像の統合化を通してなされる。つまり，われわれが本研究でとり上げた自己イメージや自己の能力評価は，職業アイデンティティの形成を考える上で，重要な役割をもっているのである。

従来，自己イメージとくに性役割タイプの研究では，masculinity が道具的・課題解決志向的役割と関連があり，femininity が表出的役割と関連すると考えられ

てきた（Broverman, et al., 1972)。こうした考え方に立てば，masculinity は自己の能力評価の高いことと，ひいては職業アイデンティティの明確さと密接な関係があると考えられる。例えば，Grotevant ら (1982) は男女とも masculinity が職業アイデンティティの形成と関連していることを見出している。

しかし，本研究の結果に見るように，自己イメージの下位尺度の平均値を自己能力評価の水準間で比較してみると，能力評価の高い群は低い群よりも，力強い自己イメージを描いているだけでなく，親しみやすく社交性のある自己イメージをもっていることがわかる。また，本研究で性役割タイプとの関連をみた結果によると，能力評価の高い群ではMF型が多いのに対して，低い群ではmf型が多くなっている。これらの結果から，職業に必要な基本的能力をもち合わせていることは，いわゆるmasculinity ばかりでなく，femininityをもっていることとも結びついていると思われる。さらに，性役割タイプとキャリアの決定過程との関連を調べた研究では，MF型の者がmf型の者よりも，キャリアの決定において積極的であるという知見もある (Moreland, et al., 1979)。このような結果から，青年自身が自分の能力や自己イメージについてはっきり認識している場合には，職業アイデンティティが確立できると考えられる。さらに，将来の職業生活についても明確な考えをもつことができるであろう。

自己概念について明確な認識をもつことが，職業生活に関してだけでなく，大学生活のさまざまな面で自信に満ちた行動としてあらわれてくると思われる。本研究で得られた学生生活の諸側面についての評価と行動の結果をみても，能力評価の高い群は低い群に比べて，積極的で，大学生活に適応していることがわかる。しかもこの傾向は，専門群・非専門群を問わず認められており，自己能力評価の水準が学生生活を理解する上で有力な手がかりになることを示している。今後は，この自己能力評価が，どのようなかたちで形成されるのか，例えば，学校での成績によるのか，母親が働いていることと関連するのか，あるいは幼児期以後のさまざまな経験と関係があるのかなどの検討が必要になろう。

これまでみてきたように，職業への社会化，とくに職業アイデンティティの確立には，自己の能力評価が高いことが重要な要因となっているが，このアイデンティティの確立に大学はどのように影響を及ぼしているのであろうか。この問題に考察を加えることが第3の課題となる。われわれが得た結果のうち特徴的なものは次のようなことである。①非専門群では社交性のある自己イメージを描いており，学生生活でも対人関係に力をいれている。②専門群では社会的役割態度において，家庭における役割について伝統的な考え方を支持している。③専門群では，できるだけ継続して仕事をしたいと望んでいる。また，人間的成長が職業生活を送る上で重要な事柄であり，それを実現する手段として大学が役立っていると考えている。

上記の結果から明らかなように，非専門群と専門群とではものの考え方や生き方にかなりのちがいがみられる。とくに，非専門群において，対人関係，具体的には，同世代の友人との語らいやスポーツなど自由な時間をエンジョイすることに時間を費しているという結果を得たことは，最近の高校生が大学生活に何を期待するかという調査結果からも理解できる。武内 (1980) は，日米高校生比較調査の結果を紹介するなかで，アメリカの高校生には「職業に役立つ資格や技術を身につけたい」という実利的期待をあげる者が多いのに対して，日本の高校生には「ひろい社会的視野を身につけたい」「学問に打ち込みたい」という抽象的期待をあげる者が多い。またそれとともに「友だちや異性との交友を深め青春を楽しみたい」「のんびり過ごしたい」というレジャー志向が強いと指摘している。これを本研究の結果にてらしてみると，専門群は実利的志向，非専門群はレジャー志向ということになろう。

なるほど専門群が所属する看護科・保育科は，他の多くの学科に比べて教育目標も明確であり，将来の職業生活と結びついているために，大学生活や将来の生活についての見通しもたてやすいと思われる。また，入学目的も明確であり，その上第1志望で入学する者が多いので，学生自身が大学の雰囲気になじむのも早いものと思われる。しかし，本研究で示されたように，将来の職業生活で重要な事柄を実現する手段として，大学が役立っているかという点になると，専門群のなかでも評価が分かれてくる。たしかに専門群は非専門群よりも大学の効用を認めているが，専門群のなかでも，自己能力評価の高い者が一層この点を高く評価しているのである。このことは，専門的職業教育を行なっている学科では，将来の職業生活と直結した教育が可能であるという利点はあるが，適性や能力がないと判断した学生にとっては，別の進路を考えないと困った状況になるという事態を容易に作り出してしまうという欠点があることを暗示している。本研究では，専門群における能力評価の低いグループについて上述の報告以上の検討を加えることはしなかった。今後さらに検討する必要があると思われる。

さいごに，社会的役割態度のうち，家庭における伝統役割について非専門群よりも専門群で支持する傾向が見出された点について簡単にふれておく。これまでの研究

によれば（若林，他，1981），働く婦人グループでは力強さの自己イメージと社会参加の平等主義との間に密接な関係を見出していた。この点から考えれば，本研究での専門群が非専門群に比べて，平等主義的態度において明確な差を示すことが期待された。しかし実際には両群間で3つの態度について期待された結果は得られなかった。この点については，はっきりした理由を解明するまでに到っておらず，今後の課題として残されている。

Ⅵ　結果のまとめと討論

本研究では，女性にとって職業自己像の達成がどのようになされ，それが職業選択過程にどのような影響を与えるか，という問題を解明するために，3つの課題をもった質問紙調査が計画された。

第1の課題は，従来の諸研究の問題点に検討を加えた上で，性役割イメージを測定するために相互に独立な masculine と feminine の2次元を含む尺度を独自に構成し，性役割の4類型をタイプ分けすることである。この準備段階として，まず若林ほか（1981）で作成された両極の SD 尺度と，そこで用いられた特性語をバラバラにした単極尺度との因子構造を比較検討した。そして，SD 尺度で対をなす特性が，単極尺度の因子分析の結果得られた因子の上に有意味な対極性をもって出現しているかを検討した。本研究の結果は，両極尺度で得られた4因子がそれぞれ，「力強さ」「親しみやすさ」「社交性」「細やかさ」と命名される内容からなっていることを示した。両極尺度で得られた各因子の尺度は，若林ほか（1981）の結果とほとんど対応したものであり，また単極尺度の因子分析の結果も，内容的に両極尺度と対応するものであった。つまり，全般的に，対をなす特性は尺度様式を問わず，同じ因子尺度に属していることが明らかにされた。この結果にもとづいて，相互に独立な男性特性と女性特性に係わる形容詞群を選び出し，Masculinity 得点と Femininity 得点を算出する尺度を作成した。この尺度については分析の結果，両特性がある程度独立性を保っていること，男性特性は力強さの因子のみに属し，女性特性はほとんどが細やかさ因子と社交性因子に属していることが明らかにされた。

次に，上で作成された性役割尺度にもとづいて得られた，4つの性役割タイプ（MF型，Mf型，mF型，mf型）の妥当性を検討するために，各タイプの女子短大生が，大学生活への適応や職業志向においてどのような違いを有するのかを検討した。その結果を要約すると次の4点になる。①性役割タイプと自己イメージの諸次元との関連をみると，力強さ，親しみやすさ，社交性の3尺度でMF型の得点が高く，細やかさ尺度ではmF型の得点が高い。全体としては，MF型で自己イメージの評価が高く，mf型で低いことが示された。また，この傾向は，職業生活に必要な能力についての自己能力評価においても認められた。②同様の傾向は，大学への好感度，大学との一体感，大学生活での対人関係・人格陶冶に関する日常活動へ力を注ぐ程度についても認められた。つまり，MF型が諸活動に積極的であるのに対し，mf型は無気力であり，相対的に学生生活への適応が低いと考えられた。③社会的役割態度についてみると，全般的には，どのタイプも平等主義的であると同時に，伝統主義的な役割態度をもっているが，4つのタイプの相対的な関係をみると，Mf型がもっとも平等主義的傾向を強くもち，mF型がもっとも伝統主義的であることがわかる。④将来の職業生活に対する意識についての結果をみると，仕事の継続意志の結果も含めて，Mf型で仕事への構えがもっとも積極的であり，mF型でもっとも消極的である。

これらの結果をまとめてみると，MF型で広い意味での自己評価が高く，mf型で低いこと，また必ずしも明瞭ではないが，この傾向は学生生活への適応についても認められること，がわかる。このことは，いわゆるandrogynous な女性がもっとも適応がよく，undifferentiated な女性がもっとも社会的に適応していないというこれまでの知見（Bem，1975；Spence，Helmreich and Stapp，1975；Spence and Helmreich，1978）を概ね支持しているといえる。一方，社会的役割態度や将来の職業生活に対する意識についての結果によると，もっとも平等主義的態度を有しており，かつ仕事の構えも積極的なタイプは，MF型ではなく，Mf型である。またそれと対照的な，もっとも伝統主義的で仕事に消極的なタイプは，mF型であった。このことは，役割態度や職業意識の面では androgyny タイプよりもhigh masculinity がより有力な基盤となっていることを意味している。

第3の課題は，女子学生が特定の短大を選び，そこでの大学生活を通じて一定の社会的態度や職業志向を形成していく背景にはどのような要因が作用しているかを明らかにすることであった。そのために，本研究では，自己能力評価水準と所属学科の専門教育志向の程度によって分けられた4群の学生が，入学に際して考慮した要因，大学生活，将来の職業生活に対する意識にどのようなちがいをみせるかを検討した。その結果は，次の3点に要約できる。①大学入学に際して，専門群は第1志望の者が多く，しかも自分のなりたい職業と結びつけて大学の選択を行なっている。一方，非専門群では学業成績や家族の意見など，どちらかといえばあまり主体的でない要

因にもとづいた選択が行なわれている。②専門群に比べて，非専門群では社交性のある自己イメージを描いているばかりでなく，大学生活においても対人関係にかかわる活動に力を注いでいる。一方，専門群では社会的役割態度の中では伝統主義的傾向が強いが，将来の職業生活に対する意識をみると，仕事に対してより積極的であり，大学教育が将来の職業にとって重要な事項を実現する手段として役立っていると考えている。③自己能力評価の水準との関連でみると，能力評価の高い者は，低い者よりも，力強い，親しみやすい，社交性のある自己イメージを描いている。また，学生生活にも満足しており，大学への一体感が強い。さらに，日常活動に対しても積極的にとり組んでいる。性役割タイプとの関連をみると，能力評価の高い群ではMF型がもっとも多く，低い群ではmf型がもっとも多い。能力評価の高い群は大学の効用も積極的に認めているが，とくに専門群で能力評価の高い群でその傾向が顕著である。④将来の職業生活で重要な事柄としては，人間的成長や職業上の成功をあげる者が多い。そして，人間的成長を重要だとする者は大学が役立っていると考える傾向が強く，職場の環境をあげる者はあまり役立っているとは考えていない。

本研究で得られた知見をまとめてみると，性役割タイプのとらえ方として，masculinity と femininityを独立して取り扱い，MF型とmf型とを区別するというSpence ら（Spence，Helmreich and Stapp，1975; Spence and Helmreich，1978）の考え方が概ね支持されたものと考えることができる。さらに，自己評価や大学生活への適応などの結果にみるように，この性役割タイプの分け方は妥当なものであることが示された。しかし，社会的役割態度や将来の職業生活に対する意識についての結果にみられるように，masculinity も femininity も高得点のMF型（androgyny）よりも，masulinity が高く femininity が低いMf 型と，masculinity が低く femininity が高いmF型とが対照的な結果をみせた。つまり，これらの側面ではmasculinity が有力な次元であると思われる。

われわれは，女性の社会生活への適応がmasculinity の次元にかかわっており，MFタイプの女性は社会環境への適応がもっとも促進されると考えてきた。本研究の知見は，この仮説を基本的に支持してきたが，大別して，日常の具体的行動についてはMF型とmf型との間に顕著なちがいがみられるが，役割態度や職業意識のレベルではmasculinity 次元が有力であるということを示している。Grotevant ら（1982）は，男女ともmasculinity が職業アイデンティティの形成に関連しているという。これらの考え方を参考にして，本研究で得られた知見についてさらに検討しなければならないと思われる。

本研究では，性役割分析に加え，短大生の職業社会化において大学が果す機能について検討することがもう1つの重要な目的であった。この問題についてみてみると，まず，短大生にとって，所属する学科が専門的職業教育を志向しているかどうかが，入学時点での学生の構えにかなり影響することが明らかとなった。さらに，入学後の教育カリキュラムによって，専門教育が多くなればなるほど，専門群では職業への社会化が促進され，非専門群とは明らかに異なった職業アイデンティティが作られるものと思われる。しかし，実際の大学生活へのとりくみ方や将来の職業への準備ということに関してみると，所属学科の専門化の程度とともに，学生自身が自分の職業的能力をどう評価しているかが決定的に重要であることが見い出された。ことに，自己能力評価の高い群にみられる学生生活への適応のよさ，あるいは，専門群の中で自己能力評価の高い群で大学の効用を有意に高く認めているという事実は，今後の研究に大きな示唆を与えている。また，それだけに，専門群の中で，自己の能力に疑問をいだいたり，適切な職業アイデンティティが形成されないままに学生生活をすごす女子青年が現われた場合に，それにどのように対処すべきかということも考えておく必要があろう。このような点を考えると，学生の自己能力評価がどのようにして形成されてくるのかということをさらに検討する必要がある。

以上の結果を総括すると，女子大生の場合，大学の選択や入学過程（すなわち大学教育への入口）と，大学内部での行動や環境への適応（すなわち中間プロセス），そして卒業後の職業選択や職業生活に対する志向（すなわち大学教育の出口）という3つの職業社会化の局面において，androgyny ないし masculinity の性役割イメージと実際的能力側面での高い自己能力評価という2つの要因が，非常に重要な役割を果していることが明らかとなった。この2つが，女性の社会化過程におけるごく早い時期においてある程度形成されてしまう，という指摘は数限りなく存在している。しかし大学の選択や大学生活での諸経験（すなわち高校卒業から大学生活を経て就職するまでの過程）をつうじ，自己像や自己能力評価がまったく変化しないと考えることはむずかしい。特に後者は，実際的・具体的な能力の学習の結果として，大きく変化し得る性質のものであると考えられる。このことは，職業社会化の入口→中間プロセス→出口の3つの局面において，性役割自己像や自己能力評価がいかにして形成され，結果として職業社会化過程全体にどのような影響を与えていくかについて，女子青年各人の職業的自立に焦点を当てた縦断的研究が必要であることを示唆し

ているものといえよう。

文　　献

Astin, A. W. 1977 *Four critical years: Effects of college on beliefs, attitudes and knowledge.* San Francisco: Jossey-Bass.

Baucom, D. H. 1976 Independent masculinity and femininity scales on the California Psychological Inventory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **44**, 876.

Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **42**, 155-162.

Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology,* **31**, 634-643.

Bem, S. L. 1977 On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **45**, 196-205.

Broverman, I. K., Vogel, S. R., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., And Rosenkrantz, P. S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. *Journal of Social Issues,* **28**, 59-78.

Cosentino, F., and Heilbrun, A. B. 1964 Anxiety correlates of sex-role identity in college students. *Psychological Reports,* **14**, 729-730.

Crites, J. O. 1965 Measurement of vocational maturity in adolescence: I. Attitude test of the Vocational Development Inventory. *Psychological Monographs,* **79** (2).

Fitzgerald, L. F., and Crites, J. O. 1980 Toward a career psychology of women: What do we know? What do we need to know? *Journal of Counseling Psychology,* **27**, 44-62.

Gall, M. D. 1969 The relationship between masculinity-femininity and manifest anxiety. *Journal of Clinical Psychology,* **25**, 294-295.

後藤宗理　1981　女性に対する「性役割尺度」作成の試み－ＳＤ法による性役割観の分析－　名古屋市立保育短期大学紀要，**20**，９－26.

後藤宗理・久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美　1979　大学生の社会的態度に関する研究　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**26**，37－53.

Grotevant, H. D., and Thorbecke, W. L. 1982 Sex differences in styles of occupational identity formation in late adolescence. *Developmental Psychology,* **18**, 396-405.

Gump, J. P. 1972 Sex-role attitudes and psychological well-being. *Journal of Social Issues,* **28**, 79-92.

Harren, V. A., Kass, R. A., Tinsley, H. E. A., and Moreland, J. R. 1978 Influence of sex role attitudes and cognitive styles on career decision making. *Journal of Counseling Psychology,* **25**, 390-398.

Heilbrun, A. B. 1981 *Human sex-role behavior.* New York: Pergamon Press.

Holland, J. L. 1973 *Making vocational choices.* Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，**26**，１－11.

Jones, W. H., Chernovetz, M. E., and Hansson, R. O. 1978 The enigma of androgyny: Differential implications for males and females? *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **46**, 298-313.

Kelly, J. A., and Worell, J. 1977 New formulations of sex roles and androgyny: A critical review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **45**, 1101-1115.

Kohlberg, L. 1966 A cognitive-developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes. In E. E. Maccoby (ed.), *The development of sex differences.* Stanford, Calif.: Stanford University Press.

久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子　1977　中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**24**，67－83.

Lubinski, D., Tellegen, A., and Butcher, J. N. 1981 The relationship between androgyny and subjective indicators of emotional well-being. *Journal of Personality and Social Psychology,* **40**, 722-730.

Lunneborg, P. W. 1978 Sex and career decision-making styles. *Journal of Counseling Psychology,* **25**, 299-305.

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* **3**, 551-558.

南　隆男・若林　満・西河正行・小林ポオル　1979　大学組織における学生の自我同一性確立過程—総合的継時分析にむけての覚え書き—　慶応義塾大学，哲学，**71**，97 — 162.

宮川永子　1979　女子短大生の職業意識調査・その1　聖和学園短期大学紀要，**16**，65 — 104.

Moreland, J. R., Harren, V. A., Krimsky-Montague, E., and Tinsley, H. E. A. 1979 Sex role self-concept and career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, **26**, 329-336.

ＮＨＫ放送世論調査所（編）　1979　日本人の職業観　日本放送出版協会

日本教育学会入試制度研究委員会　1978　入学試験制度の教育学的研究　第４集　日本教育学会

Osgood, C. E., Suci, G. J., and Tannenbaum, P. H. 1957 *The measurement of meaning.* Urbana, Ill.: University of Illinois Press.

Parsons, T., and Bales, R. F. 1955 *Family, socialization and interaction process.* New York: Free Press of Glencoe.

Rosenkrantz, P., Vogel, S., Bee, H., Broverman, I., and Broverman, D. M. 1968 Sex-role stereotypes and self-concepts in college students. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **32**, 287-295.

Spence, J. T., and Helmreich, R. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates, and antecedents.* Austin: University of Texas Press.

Spence, J. T., Helmreich, R., and Holahan, C. K. 1979 Negative and positive components of psychological masculinity and femininity and their relationships to neurotic and acting out behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1673-1682.

Spence, J. T., Helmreich, R., and Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 29-39.

高橋　均　1980　職業的社会化．山村　健・天野郁夫　編著「青年期の進路選択」有斐閣

武内　清　1980　高校教育の変貌．山村　健・天野郁夫　編著「青年期の進路選択」有斐閣

内田靖子・村田恵子・白石和子・山本よしゑ・村中陽子・長江和子　1978　看護学生の看護職に対する適応過程に関する研究　第１報：進路決定の要因と入学時の看護に対する認識および看護職への志向の強さ　東海大学短期大学紀要，**12**，19 — 33.

若林　満　1981　キャリア形成とモティベーション．西田耕三・若林　満・岡田和秀　編著「組織の行動科学」有斐閣

Wakabayashi, M., Graen, G., Sano, K., Minami, T., and Hashimoto, M. 1977 Japanese private university as a socialization system for future leaders in business and industry. *International Journal of Intercultural Relations*, **1**, 60-80.

若林　満・鹿内啓子・後藤宗理　1981　女性の社会的役割態度と職業自己イメージ—尺度の構成と比較分析—　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**28**，71 — 98.

（1982年７月31日　受稿）

原　　著

A STUDY ON THE PROCESS OF FORMING SOCIAL AND OCCUPATIONAL ROLE ATTITUDES AMONG THE FEMALE COLLEGE STUDENTS:

Influences of sex-role types and self-evaluated competence on the process

Keiko SHIKANAI, Motomichi GOTO, and Mitsuru WAKABAYASHI

The present study is designed to examine the following two questions. (1) How do the sex-role types classified by using masculinity-femininity scales relate to student's attitudes toward the self, occupation, the college life, and female roles in the society? (2) What is the effect of differences in self-evaluated competence among female students upon the quality of their college lives and occupational orientations? To answer the above questions three different lines of research efforts were pursued. First, a masculinity scale and a femininity scale were constructed independently for the purpose of classifying subjects into one of the following four sex-role types: androgynous, masculine, feminine, and undifferentiated. Second, validity of sex-role types was examined by demonstrating differential levels of psychological adaptability to the college life, occupational self image, job orientations, and the like among the four types of female college students. Third, student's self-evaluation of one's competence was measured to determine its relations with the choice of college, attitudes toward college environment, activities in student roles, job orientation, and the occupational choice. For the above analyses self-evaluated competence, in addition to the sex-role type, is assumed to be one of the most important determining factors of the occupational socialization within the college.

Subjects consisted of 378 female junior college students derived from professionally oriented course (nurse and kindergartener, n = 204) and nonprofessional humanity courses (n = 174). They were asked to respond to two sets of questionnaires that were administered at approximately one month interval, in December, 1981 and January, 1982. The first part of questionnaires contained 7 instruments; (1) *student self-image* included 31 adjective pairs arranged with a semantic differential format, (2) *satisfaction with college life* used 6 items based on a 7-point scale, (3) *self-evaluated competence* contained 8 different abilities to be evaluated by each student by using 5-point scales, (4) *student role activities* were measured in terms of time and effort spent by each student in 20 different dimensions based on a 7-point scale, (5) *occupational orientation* presented 10 different occupational goals from which students were asked to choose three most important ones, and students estimated the *utility of college* for achieving these goals, (6) *career choice* as one's willingness to pursue career life and the choice of occupation, and (7) *reasons for choosing a college* that were measured by using 12 items based on a 5-point scale. The second part of questionnaires contained three instruments; (1) *social-role attitude* included 31 statements regarding roles of women in the society and subjects rated each one by using 7-point scales, (2) a *sex-role type* instrument included 62 adjective scales along which student's self-image was rated based on a 7-point scale, and (3) *identification with the college* included three items regarding the student's liking of the college.

A series of factor analyses were performed for those instruments with complex dimensions. Then, items contributing to each factor were combined into a composite scale. Results of the major analyses are summarized as follows.

(1) Both separate adjective scales and combined semantic differential scales produced 4 orthogonal factors that were labelled as potency, affinity, outgoingness, and delicacy factors, respectively.

(2) Masculinity and femininity scales were developed by selecting sets of stereotyped masculine and feminine adjectives, which were proved to be mutually uncorrelated. Then, by combining masculinity and femininity dimensions the following 4 sex-role types were created: high masculine – high feminine type (MF or androgynous type), high masculine – low feminine type (Mf or masculine type), low masculine – high feminine type (mF or feminine type), and low masculine – low feminine type (mf or undifferentiated type). Comparison among four groups produced two interesting results. (a) MF type students showed as achieving the highest scores on self-

evaluated competence followed by Mf and mF group students, while the undifferentiated mf type students scored the lowest on this scale. The same pattern of results was found on scales for student role activities and identification with the college. (b) The Mf type students were found supporting most strongly liberalized women's roles in the society, work-centered occupational goals, and willingness to continue one's occupation, while the mF type students were the lowest in supporting them. These results suggested that the masculinity dimension in the female students' self-image was providing most strong driving forces for developing their positive attitudes toward social as well as occupational roles.

(3) The impact of self-evaluated competence and the type of education upon major variables on the process of occupational socialization (i.e., choice of the college, student role activities, occupational orientation and choice, etc.) were analyzed on the basis of a 2 x 2 ANOVA design. For this analysis 156 students were randomly selected, and were assigned to one of the four subgroups constructed by combining the educational course factor (professional vs. nonprofessional) with the competence factor (high vs. low) in a balanced proportion. The ANOVA results demonstrated that professional course students tended to choose the college by considering their future career plans more heavily than their nonprofessional colleagues. Moreover, professional course students showed more positive attitudes toward their future occupational lives, and stronger confidence in their educational institution as a means of attaining career goals, compared to the nonprofessional course students. On the other hand, students with high self-evaluated competence tended to show significantly high self-image scores in potency, affinity, and outgoingness factors, and to show significantly strong satisfaction with the college and active involvement in their student roles, compared to those with low self-evaluated competence. Professional course students with high self-evaluated competence exhibited the stronger perceived utility of the college compared to the other group students, thus making the course-by-competence interaction effect statistically significant at the $p < .05$ level. Finally, sex-role types and self-evaluated competence demonstrated strong association between the two; 53.2% of high competence students were classified as MFs and 63.6% low competence students as mfs.

The above results provided evidence to support preceding studies on sex-role types. Moreover, our findings indicated differential functions among sex-role types. That is, the androgynous (MF) type is more specialized in general adaptability areas, while the masculine (Mf) type is in occupational choice areas. Equally important is the fact that self-evaluated competence that denotes self-esteem on one's work-related abilities tends to play most powerful roles in promoting occupational socialization of female college students.